

燈臺要覽

航路標識管理所

明治
37 4 2
內交

INDEX. 目 録

Introduction.	總 説	28 Kōneshima Lighthouse.	高根島燈臺
1 Illuminating Apparatus etc.	燈器及其他	29 Ōkunojima "	大久野島燈臺
2 2nd. Order fixed Light lens.	二等不動レンズ	30 Nakanohana "	中之鼻燈臺
3 1st. Order flashing Light lens and Apparatus.	一等閃光レンズ	31 Ōgeshima "	大下島燈臺
4 Harbour of Yokohama.	横浜港	32 Ōhama "	大瀬燈臺
5 Laboratory Tower.	試験燈臺	33 Nakatoshima "	中渡島燈臺
Lighthouse Board.		34 Tsurushima "	釣島燈臺
6 North and East Breakwater Lights of Yokohama.	横浜東北両水堤燈臺	35 Sengaiwa Beacon Light.	センガイ岩掛燈立標
7 Haneda Lighthouse.	羽根田燈臺	36 Kudakojima Lighthouse.	クダコ島燈臺
8 Honmoku Light ship.	本牧燈船	37 Nishinogoban Beacon Light.	西ノゴバン掛燈立標
9 Kanmonzaki Lighthouse.	觀音崎燈臺	38 Shiraiishi "	白石掛燈立標
10 Tsurugizaki "	劍崎燈臺	39 Daibabana Lighthouse.	臺場鼻燈臺
11 Jōgashima "	城ヶ島燈臺	40 Wakamatsu "	若松燈臺
12 Mikomotojima "	神子元島燈臺	41 Yeboshijima "	鳥帽子島燈臺
13 Irōzaki "	石室崎燈臺	42 Ōsezaki "	大瀬崎燈臺
14 Omaizaki "	御前崎燈臺	43 Kuchinotsu "	口之津燈臺
15 Kakedzuka "	掛塚燈臺	44 Terashima Beacon Light.	寺島掛燈立標
16 Sugashima "	菅島燈臺	45 Tobasejima Lighthouse.	戸馳島燈臺
17 Anorizaki "	安乘崎燈臺	46 Nagasakibana "	長崎鼻燈臺
18 Shiomisaki "	潮岬燈臺	47 Tsurikakezaki "	釣掛崎燈臺
19 Hinomisaki "	日御崎燈臺	48 Yakushima "	屋久島燈臺
20 Tomagashima "	苫ヶ島燈臺	49 Sotsukōzaki "	曾津高崎燈臺
21 Tenpozan "	天保山燈臺	50 Iyeshima "	伊江島燈臺
22 Wadamisaki "	和田岬燈臺	51 Tsukinjima "	津堅島燈臺
23 Yesaki "	江崎燈臺	52 Satamisaki "	佐多岬燈臺
24 Ogishima "	男木島燈臺	53 Kurasaki "	鞍崎燈臺
25 Nabeshima "	鍋島燈臺	54 Midzunokojima "	水ノ子島燈臺
26 Ōhamazaki "	大瀬崎燈臺	55 Sekizaki "	關崎燈臺
27 Kosagishima "	小佐木島燈臺	56 Murotozaki "	室戸崎燈臺
		57 Lighthouse Tender, Saibata Maru.	燈臺視察船新發田丸

總 說

航路標識トハ航行船舶ノ安全ヲ計ル目的ヲ以テ河海若クハ陸上ニ設ケタル總テノ目標ヲ云フ而シテ我邦現今ノ航路標識ヲ其種類ニヨリ大別スレハ燈標、書標及霧警號ノ三種トス

〔燈標〕ハ燈火ヲ以テ夜間航路ヲ標識スルモノニシテ其燈光ノ強弱ニ從ヒ等級ヲ定ム等級ハ折射器内徑ノ大小ニ從ヒ(閃光式ノ部ニ載セタル)一等ヨリ六等ニ別ツ其一等ヨリ三等ニ至ルモノヲ洋燈ト稱シ四等以下ノ小燈ヲ港燈ト云ヒ洋燈ノ間ニ隨所之ヲ設ク燈標ノ要部ハ燈火ニ在レバ其光力ヲ強烈ニシ之ヲ遠達セシムル爲ニ各種特別ノ作用ヲ有スル燈器ヲ以テ之ヲ覆ヒ風雨ヲ防グ爲メ之ヲ燈籠中ニ置キ燈火ノ強弱ニ從テ之ヲ適當ナル高サニ置ク

燈標ヲ細別シテ燈臺燈、船燈、導燈、掛燈、立燈、及掛燈、浮標ノ六種トス

○燈臺トハ石材金屬煉瓦混凝土若クハ木材ヲ以テ塔ノ如キモノヲ造リ頂上ニ燈籠及照光器等ヲ装着シテ燈火ヲ點シ夜間ハ其高低及燈質等ニコリテ航海者ヲ安全ノ航路ニ導キ晝間ハ其形狀及着色等ニコリテ其所在ヲ識別セシムル効用ヲ有スルモノニシテ多クハ看守員ヲ置ク

○燈船トハ堆洲ノ附近ニ碇置シテ航路ヲ示ス船ヲ云フ多クハ帆船ニシテ紅色ニ塗り橋上ニ燈明ヲ點シ時トシテハ船内ニ霧警號ヲ設ク

○燈竿トハ多ク埠頭ニ設ケテ其附近ヲ照ス所ノ標識ニシテ柱頭ニ燈明器ヲ吊セルモノナリ

○導燈トハ二基以上ノ燈標ヲ高低ノ位置ニ設ケテ狹隘ナル航路ヲ示シ船舶ヲシテ其燈標ヲ一直線ニ視テ兩舷ノ危險物ヲ避ケシムル用ニ供スルモノナリ

○掛燈立標トハ河海ニ於ル普通立標ノ上ニ燈明ヲ掲ケタルモノニシテ石油又ハ石油瓦斯ヲ點シ數十日間燈火ヲ持續セシムルヲ得ルモノナリ

○掛燈浮標トハ普通浮標ノ上ニ石油燈或ハ瓦斯燈ヲ點スルモノナリピンチ瓦斯ヲ用フルモノハ點燈後數週間ハ燈火ヲ持續ス

燈籠ノ海ニ面スル部ハ厚硝子板ヲ以テ蔽ハル其構造三種アリ粗ナルモノハ縦横骨内ニ平硝子ヲ箱メタルモノトス次ハ斜骨ニ改メ平板硝子ヲ箱メタルモノ第三ハ螺旋骨ニ圓筒形硝子板ヲ箱入シタルモノトス燈籠ノ屋ハ普通二重トシテ上部ニ換氣孔ヲ設ク燈籠ノ下部ニハ回轉器械或ハレンズ蓋等ヲ置キ其上ニ照光器ヲ安置ス(レンズ蓋ノ下ニ我邦特有ノ地震停振盤ヲ備フルモノアリ)回轉器械ハ齒車裝置ノ時辰儀ト大同小異ニシテ鍾重ヲ用ヒテ燈明器臺ヲ回轉スルモノナリ但掛燈立標ノ如キ小燈器ニ於テハ近時電動機ヲ以テ之ヲ回轉シ看守人ヲ要セスシテ數十日間回轉ヲ持續スルモノアリ

- 用ノ燈質區別ハ左ノ如シ
- (一) 不動燈 間斷ナク一定ノ光力ヲ持續スルモノ
 - (二) 閃光燈 一定ノ回期ニ於テ俄然一閃光ヲ發ス恰モ電光ノ如ク暗黒時間長キモノ
 - (三) 連閃燈 二個以上ノ閃光必スシモ同色ナラス幾許カノ暗黒ヲ隔テテ、發スルモノヲ云フ二連閃三連閃紅白連閃一紅二白連閃二紅一白連閃ノ類ナリ
 - (四) 回轉燈 一定ノ回期ニ於テ漸次光力ヲ増シ其最強烈ニ達シタル後漸次光力ヲ減シ遂ニ暗黒ニ至ルモノ
 - (五) 不動回轉燈及不動連閃燈 不動燈ト回轉又ハ連閃燈ヲ聯成シタルモノニシテ共ニ近時之ヲ設クルモノ少ナシ
 - (六) 明暗燈 不動光ニシテ一定ノ回期ニ俄然一回ノ全暗ヲ現スルモノヲ云フ但通例明間ハ暗間ヨリ永ク閃光又ハ回轉ニ比スレハ明間永シ
 - (七) 複連明暗燈 不動光ニシテ一定ノ回期ニ俄然二回以上ノ全暗ヲ呈スルモノ

スルモノ

(八) 互光燈 異色光(概テ紅白)ヲ互發シ其間ニ暗黒ヲ生セサルモノ

(九) 双燈 燈質ノ誤認シ易キ場所ニ於テハ接近シタル位置ニ二燈臺ヲ並列シ或ハ一燈中ノ高低兩所ニ異種ノ燈器ヲ備フルモノヲ云フ近時之ヲ設クルコト稀ナリ

發光燃料 燈標用燃料トシテ昔時ハ燧火又ハ油歐洲ニテハ薪石炭ヲ用ヒ後ニ蠟燭及油ヲ用ヒタルカ石油ノ發見後盛ニ之ヲ用ヒ現時ニ在リテハ石油石炭瓦斯石油瓦斯石油蒸發燈(機ヲ用テ自熱)及電氣燈ヲ用フアモテリン瓦斯ノ如キハ試驗中ニ屬ス而シテ石炭瓦斯ハ燈臺用トシテ其應用極メテ稀ナルモ石油瓦斯ハ英佛盛ニ之ヲ浮標ニ應用シテ燈臺ニモ用ヒタリ我邦ニテハ二十一年(後ニ之ヲ)三十二年(後ニ之ヲ)式油瓦斯製造所ヲ增ノ浦燈臺ニ建設シ目下其瓦斯ヲ二燈臺四浮標ニ使用セリアモテリン瓦斯ハ光力純白強烈ニシテ極メテ燈臺用ニ適スルモ其價貴キヲ以テ其用廣カラス

電氣燈ハ弧燈ト自熱燈ト二種アリ弧燈ハ四十餘年前初メテ英佛ノ二國之ヲ用ヒ我邦ニテハ明治三十四年始メテ尻矢崎燈臺ニ應用セリ自熱燈ノ應用盛ニナリタルハ千八百八十二年以來ニシテ主トシテ小燈臺ノミニ使用セラル石油蒸發燈ハ千九百九十九年佛國ノ創製ニ係リ近時應用セラル、ニ至レリ此燈ハ火口ノ熱ヲ藉リテ油ヲ直接ニ氣體ニ變センメ自働的ニ空氣ト混合燃焼スルモノニシテ火燭上ニオトエル氏ノ較ヲ置キ火光ヲ自熱ナラシムルヲ主眼トス本邦ニテハ本年始メテ之ヲ姬島及水ノ子島燈臺ニ應用セリ

〔畫標〕ハ燈火ヲ點セス晝間航路ヲ標識スルモノニシテ立標、陸標、導標、浮標及浮標ノ五種アリ何レモ特別ナル若色ト各種ノ形狀ヲ有スルモ暗礁湖渚及沈沒船等ノ所在ヲ示シ航海及入港船舶ノ指導ヲナスモノ

ナリ。立標ハ石材、金屬、煉瓦、混凝土或ハ木材ヲ以テ海中岩礁ノ上ニ立ルモノ。陸標ハ暗礁附近航海又ハ碇泊地ヲ示ス爲メ陸上ニ立ルモノ。導標ハ港灣若クハ海峡入口等ニ立テ、船舶轉針ニ便スルモノ。添標ハ河川又ハ港灣ノ淺キ航路ニ樹ツ其構造立標及浮標ニ比シ甚々簡易ナリ。

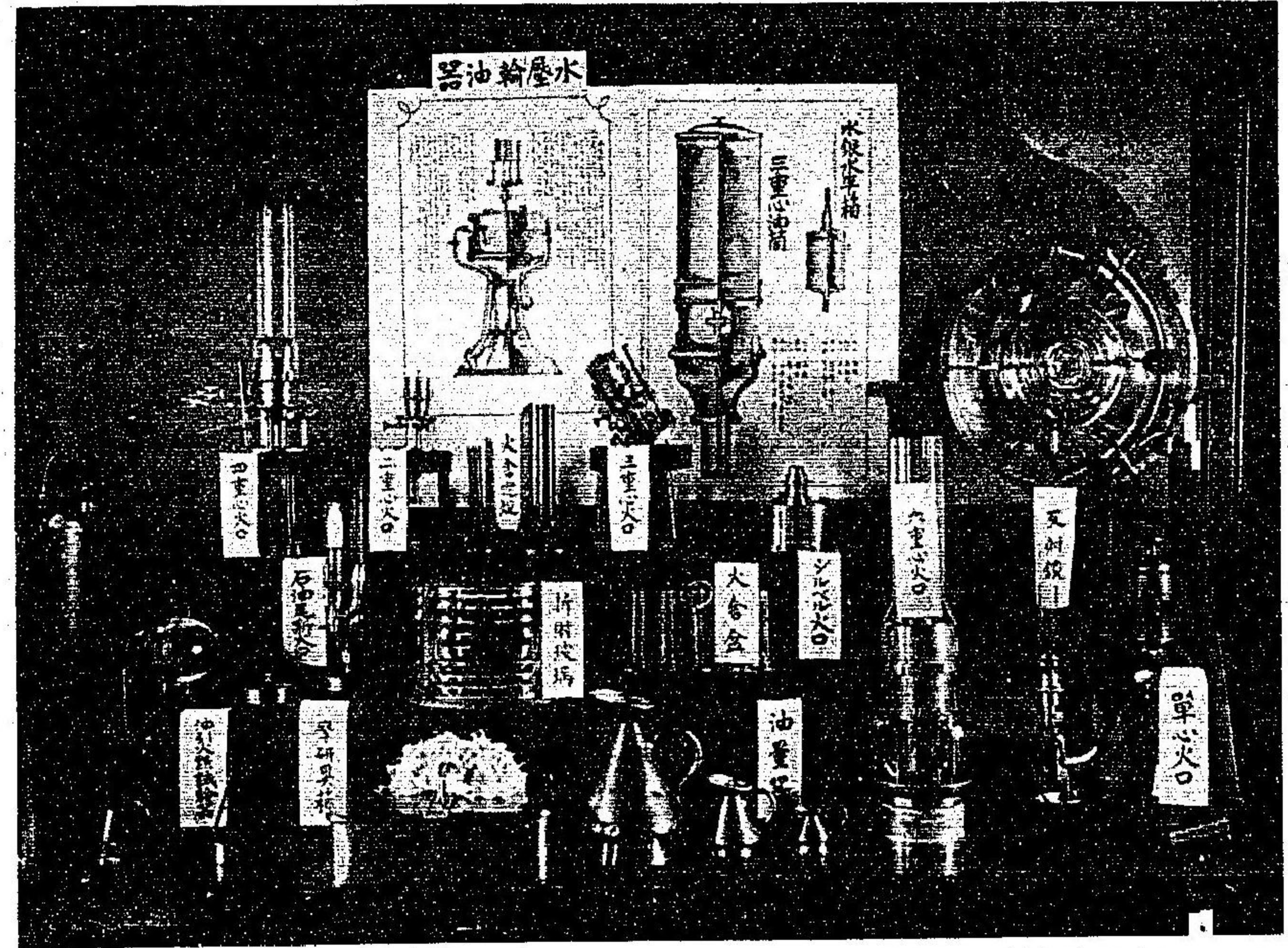
其他尙書夜ヲ別タス航路ヲ標識スル浮標アリ。自鳴浮標及打鐘浮標之レナリ。自鳴浮標トハ頂上ニ氣笛ヲ装着シ其氣道ヲ標身底ヨリ垂下スル鐵圓筒内ニ導キ浮標ガ波動ヲ受ケテ上昇スルトキ空氣圓筒内ニ進入シ其降下スルトキ氣笛管ニ入り其都度吹鳴スルモノ。打鐘浮標トハ波動ノ爲メニ音響ヲ發セシムル目的ヲ以テ鳴鐘ヲ浮標ノ上部ニ装着セルモノナリ。

〔霧警號〕ハ霧雪其他冥濛ナル天候ニ際シ船舶カ陸地若クハ燈臺ノ燈火ヲ視ル能ハサルトキ航路ヲ識別セシムル爲メニ特別ナル手段方法ヲ以テ晝夜ノ別ナク一定時ノ間隔ヲ以テ強烈ナル音響ヲ發セシムルモノニシテ霧笛、霧鐘、霧砲及爆發信號ノ數種アリ。霧笛ハ蒸氣熱氣瓦斯、石油等ノ機關又ハ水力ヲ利用シ蒸氣又ハ壓搾セル空氣ヲ發音體ニ送リテ振動發音セシムルモノニシテホイッスル、リード及細孔笛等ノ別アリ。ホイッスル笛ハ薄キ金屬製ノ圓筒ノ振動ニ由リリードノ細孔笛ハ在ル金屬板即チ舌ノ振動ニ由リ細孔笛ハ圓板ノ面又ハ圓筒ノ周圍ニ小孔ヲ穿チタルモノヲ喇叭ノ一端ニ置キ器械ヲ以テ之ヲ急轉シ其孔ヲ通シテ蒸氣又ハ壓搾空氣ヲ噴出セシムルニ由リ發音スルモノナリ。霧鐘ハ自働作用ニヨリ一定時ヲ隔テ鐘ヲ用ヒテ打鳴セシメ霧砲ハ十二斤乃至十八斤砲ニ火藥若クハ火綿ヲ裝シテ發砲シメ爆發信號ハ電氣作用ニヨリ綿火藥ヲ爆發セシメテ響ヲ發ス。

燈器 其他

〔火口〕ハ發光質物ヲ燃燒スル金屬ノ具ニシテ火燭ヲ發生スル所ヲ云フ其種類數多アリ。石油火口、菜油火口、瓦斯火口及石油蒸發火口等皆構造ヲ異ニス。石油火口ハ筒形ニシテ單心乃至六重心ヲ用フルモノヲ普通トス英國ニテハ十重心ヲ用フル處アリ植物油ヲ燈臺ニ用フルノ初ニ當テハ木綿糸ヲ編ミタル平燈心ヲ用ヒタリシガ後之ヲ筒形燈心ニ改メ内外二面ヨリ空氣ヲ誘導シテ火燭ヲ養ヒ遂ニ二重心ヨリ十重心ヲ用フルニ至レリ或ハ火口ニ中心鈕ヲ置キテ空氣ヲ偏向セシムルノ利ヲ發明シ或ハ玻璃、珪、火、舍、ヲ應用シ或ハ唧筒、裝置ヲ以テ油ヲ燈心ニ供給セリ千八百六十年ノ頃石油ヲ燈臺ノ燈火ニ用フルニ至リテ火口ノ構造ヲ變更シドラー氏ハ外部ニ一筒ヲ加ヘテ効果ヲ收メタリ爾後穿孔鈕及段違ヒ燈心火口ノ發明アリ又揮發油火口及ブールデーユ式火口及厚燈心火口ノ創製アリ厚燈心火口ハ晝夜四日間火燭ヲ持續スルノ効アリ現時我邦ニ於テハ單心乃至六重心火口ヲ用非又火燭ノ持續ヲ要スル燈器ニハ厚燈心火口或ハ石綿火口ヲ用フ。燈標ニ用フル普通通小瓦斯火口ハ輪形ニシテ其頂部ニ多數ノ細孔ヲ穿チテ瓦斯ヲ噴出セシムウイガム氏ノ火口ハ百餘ノ噴出管ヲ有ス然レモ石炭瓦斯ノ火燭ハ光力比較的弱キヲ以テ現時之ヲ應用スルモノ尠シ。石油蒸發火口ハ貯油罐内ニ石油ヲ容レ唧筒ヲ以テ空氣ヲ壓入スレバ石油ハ壓搾空氣ノ壓力ニヨリ細微ナル孔ヨリ水煙ノ狀ヲナシテ蒸發管中ニ入り

其管ノ上部渦狀ノ處ニ至リ火燭ノ熱ヲ受ケ氣狀体トナリ
 放射孔ヲ通過スルトキ若干ノ空氣ヲ誘入シ火口ニ於テ燃
 燒シ「マントル」ヲ自熱シ烈光ヲ發スルモノニシテ近時燈臺
 用火口トシテ最新有利ナルモノニ屬ス
 「ランプ」ハ油ヲ火口ニ供給スル具ヲ云フナリ「ホントーン」
 「ランプ」一名常準「ランプ」ハ油ノ水準ヲ常ニ一定ノ高サニ保
 タシムル裝置アル具ニシテ現今反照鏡其他ニ用フルモノ
 ◎器械「ランプ」ハ時辰儀ノ裝置ヲ設ケ唧筒ニテ油ヲ壓上ス
 ルモノ◎壓力「ランプ」ハ油ヲ容レタル筒中ニ重壓ヲ通シ油
 ヲ壓上セシムルモノ◎「精氣」「ランプ」ハ水壓力學ニ基キ器械
 唧筒等ノ作用ニ由ラズ水壓ト氣壓ノ差ヲ利用スルモノニ
 シテ明治十八年初メテ宗谷岬ニ應用シタルモノ◎水銀「ラ
 ンプ」ハ火口ノ頂面ヨリ少シ低キ所ノ油面ニ水銀槽ヲ浮ベ
 高所ノ油筒ヨリ管ヲ以テ油ヲ水銀中ニ注下シ之レヨリ溢
 レ出ル油ヲ火口ニ供給シ水銀ヲ以テ高所ノ油壓ヲ支ヘシ
 メ其泛フ油面ノ降ルニ從テ水銀槽ハ下リ高所ノ油モ亦下
 ル裝置ナリ



レンズ(二等不動式)

〔照光器〕ハ玻璃又ハ金属ニテ製シ焦點ノ燈光ヲ集中シテ之ヲ強大ナラシムルモノヲ云ヒ反射(Catoptric)折射(Dioptric)及反折台射(Catadioptric)ノ三種トス

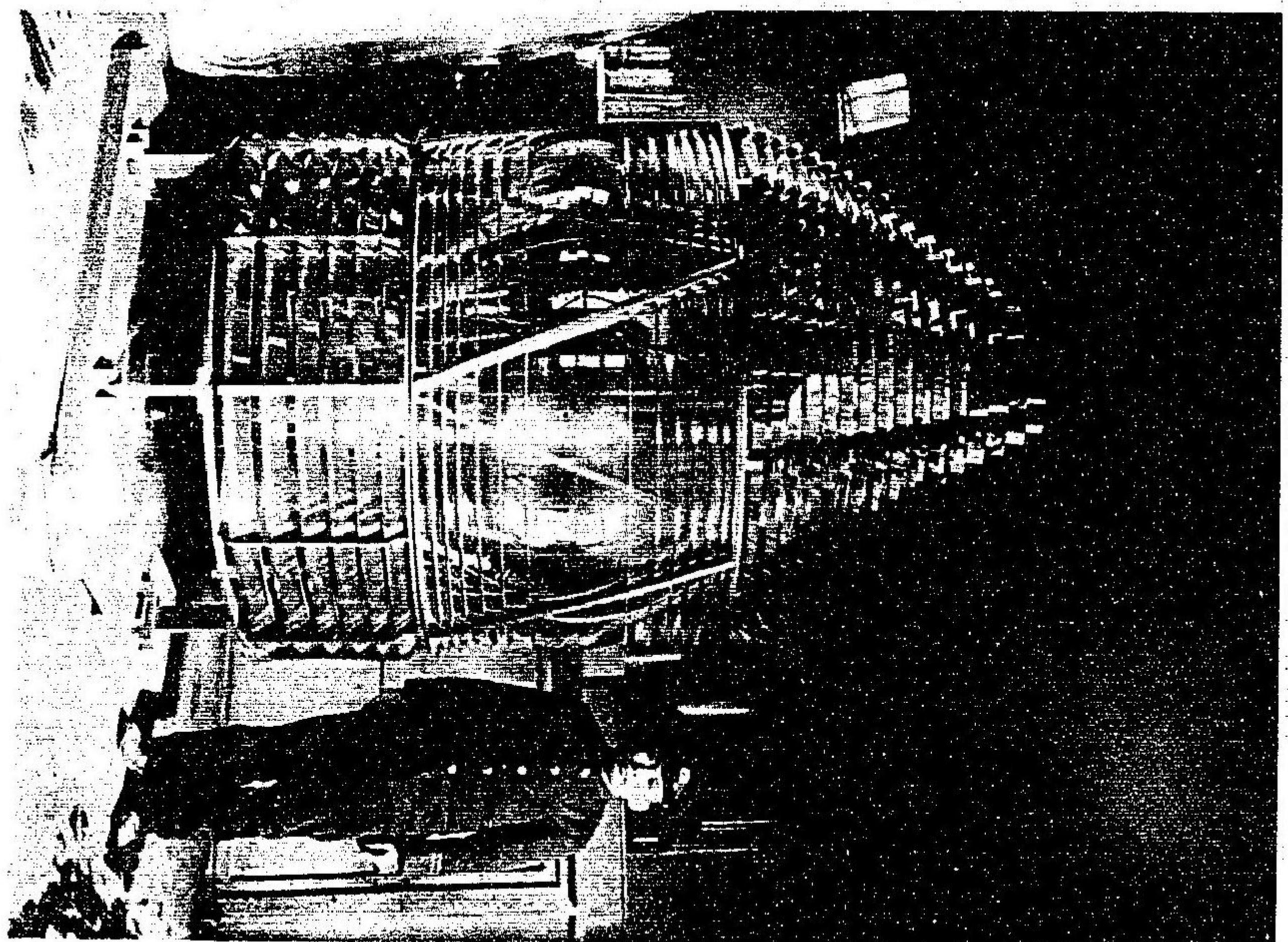
反射器又ハ反照鏡トハ其光ヲ反照スルモノヲ云ヒ折射器トハ凸透鏡或ハ三稜玻璃ニ因テ其光ヲ屈折スルモノヲ云ヒ反折台射器トハ三稜玻璃ニ入りタル光線ヲ屈折シ及之ヲ反射スルモノヲ云フ

○反射鏡 ハ歐洲ニテ昔時燈臺ニ用ヒタルモノハ木ヲ以テ拋物曲線形ノ器ヲ作り其内面ニ幅二三分長六七分ノ平面玻璃製ノ鏡ヲ固着セルモノナリシガ其後銅銀二板ヲ鍍付打延シテ之ヲ作レリステブソン氏ハ半球狀ノ玻璃製反折射鏡ヲ用ヒチャンス氏之ヲ改良シテ三稜形玻璃製反折射鏡ヲ製造セリ之ヲ金属製ニ比スレバ光線ヲ吸收シ又放熱スル弊ヲ以テ當今多ク之ヲ用フ

○反折射透鏡 千八百二十二年佛人フレネル氏始メテ數理ニ基キ燈臺用折射透鏡(現今ノ三段レンズ)ノ中央ノ部ヲ云フ)ノ形狀ヲ確定セリ次デマルセツト氏ハ「フレネル氏ノレンズ」ノ上下ニ金属製反折鏡ヲ置キ「レンズ」以外ニ散逸スル光線ヲ「レンズ」ノ放射スル光線ト共ニ放射セシムル装置ヲ考案セリ之ヲ「フレネル、マルセツト」形ト云フ「マルセツト」氏ノ反照鏡ハ尙ホ光力ヲ衰弱スルニ由リ「フレネル」氏ハ更ニ玻璃ヲ以テ之レニ換ヘン「ト」ヲ考ヘ終ニ成功セリ之ヲ「反折射透鏡」三段「レンズ」ノ上部及下部ヲ云フト云フ同氏が前

後二回ノ發明ヲ以テ茲ニ始メテ完全ナル光力利用ノ法ヲ
 得タリ實ニ燈臺事業中ノ一大進歩トス然レモ當時ハ多ク
 之ヲ平面ノ矩形(回轉透鏡ノ形)ニ作り回轉燈ニノミ用ヒタリシガ千
 八百五十年「アラン、ステブソン」氏カサザトラン、レンズ反折射透鏡ヲ輪形ニ改
 メ今ノ不動透鏡ヲ造レ、千八百八十四年同氏ノ男「トーマ
 ス、ステブソン」氏ハ「フレネル」式反折射透鏡ノ直徑ヲ大ニ
 シ「ハイヘルラヂアント」及「メソラヂアント」ト稱スル二種ノ
 反折射透鏡ヲ作り千八百八十七年「ブレネル」氏ハ數理ニ
 基キ厚ヲ減シタル透鏡ヲ發明セリ(當時之透鏡ニ用ヒタルモノ)千八百九十五
 年「バルブ」氏ハ三角玻璃ノ稜角ヲ内面ニ置クバ「フレネル」形
 透鏡ニ較ベ光力ニ於テ約百分ノ十五ヲ強列ナラシムベキ
 數理ヲ唱導セリ

附圖 ハ「フレネル」式二等不動「レンズ」ナリ



FIRST ORDER FLASHING LIGHT LENS.

レンズ(一等閃光式)

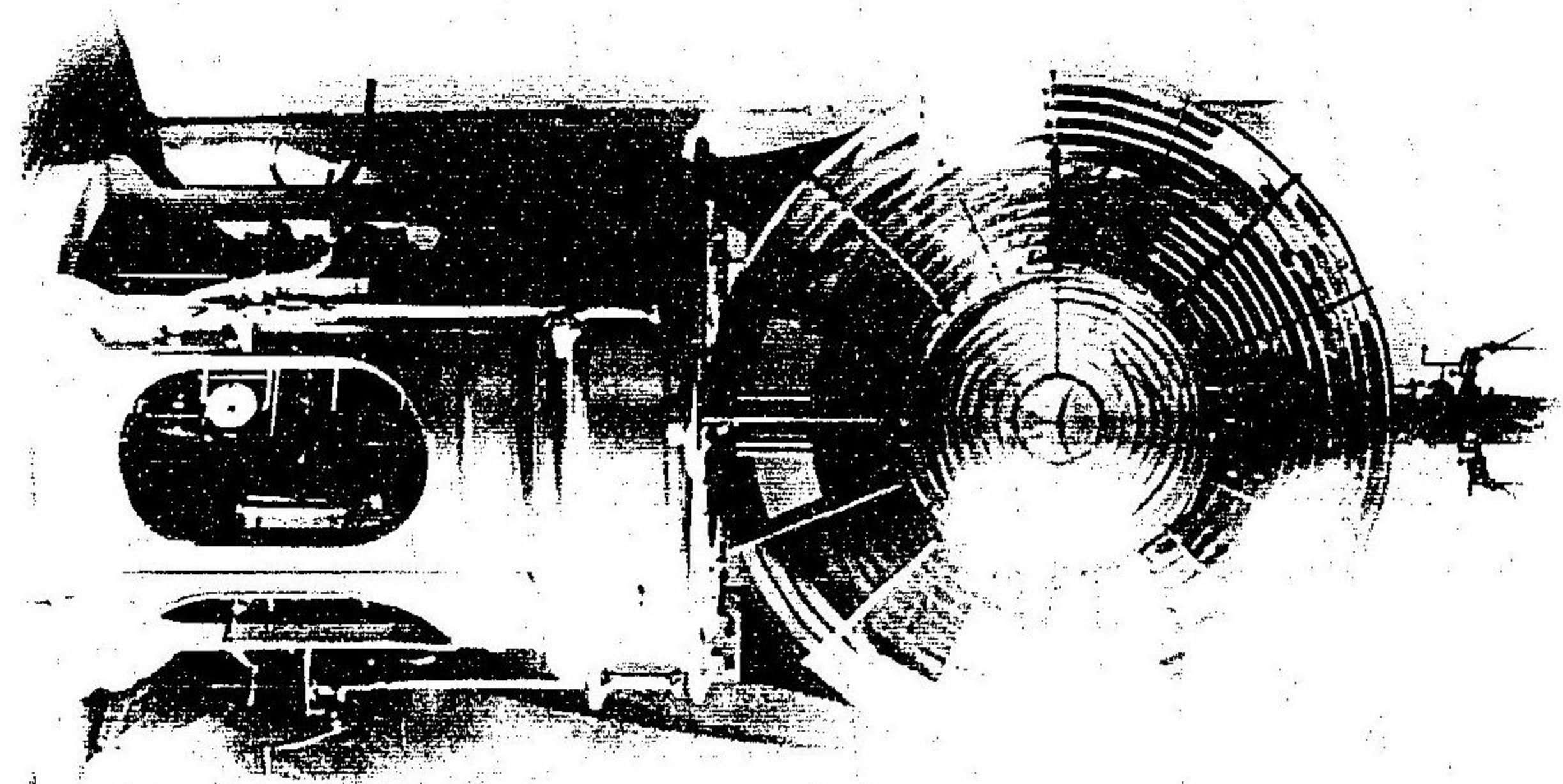
「フレネル」式回轉燈ノ光力最モ強キモノハ反射透鏡平面ニ就テ云フヲ八邊形又ハ六邊形ニ製シ圓盤上ニ置キ時辰儀ヲ以テ二分時乃至四分時ニ一回轉セシメ一分時乃至三十秒時ニ一回光ヲ發スルヲ以テ度トナセシガ千八百九十三年佛人ブールデーユ氏ハ平面百八十度ノ光線ヲ一面ノ反射透鏡ニ集中シ後方ニ反射鏡ヲ置キ其反射透鏡ヨリ一縷ノ光線ヲ放タシメタルニ舊器ニ數倍スル光力ヲ得タリ然ルニ二分乃至四分時ノ回轉ニテハ遲緩ナルニヨリ新ニ水銀槽ヲ作リテ舊器ノ軌道ニ換ヘ恰モ水銀ノ海中ニ反射透鏡ヲ載セタル船ヲ泛ベタルカ如クニ改造シ大ニ摩擦力ヲ減シタリ之ヲ以テ舊時二分時ニ一回轉セシモノ能ク十秒時ニ一回轉スルニ至レリ其光力ハ舊器ニ比シ平均三倍乃至五倍トス是レ即チ燈臺器械ニ於ケル第二ノ革新ナリ本邦ニ於テモ明治三十一年以後多ク此器械ヲ用フ

附圖ハ室戸崎燈臺ニ用ヒタルブールデーユ式一等閃光器ナリ

フレネル式及ブールデーユ閃光式光力比較

等級	内半径	燈心	フ式回轉燈光力	フ式閃光燈光力	フ式ノフ式ニ對スル比例
一	九二〇	六重心	九八、四七〇燭光	二七三、四〇〇燭光	二、七
二	七〇〇	六重心	五四、〇〇〇燭光	一五〇、七五〇燭光	二、七九
三	五〇〇	六重心	三六、七四〇燭光	一二五、九二〇燭光	三、四二
三小	三七〇	五重心	一八、四一〇燭光	五七、一七〇燭光	三、一〇
四	二五〇	四重心	六、六三〇燭光	三〇、三六〇燭光	四、五七
五	一八七	二重心	二、五二〇燭光	一二、一三〇燭光	四、八〇
六	一五〇	二重心	一、五二〇燭光	五、七三〇燭光	三、七九

但舊式一等二等ノ回轉用「レンズ」ハ八面構造ノ光力、三等以下ハ六面構造ノ光力ナリ閃光式ハ凡テ百八十度二面ノ反射射「レンズ」光力ナリ

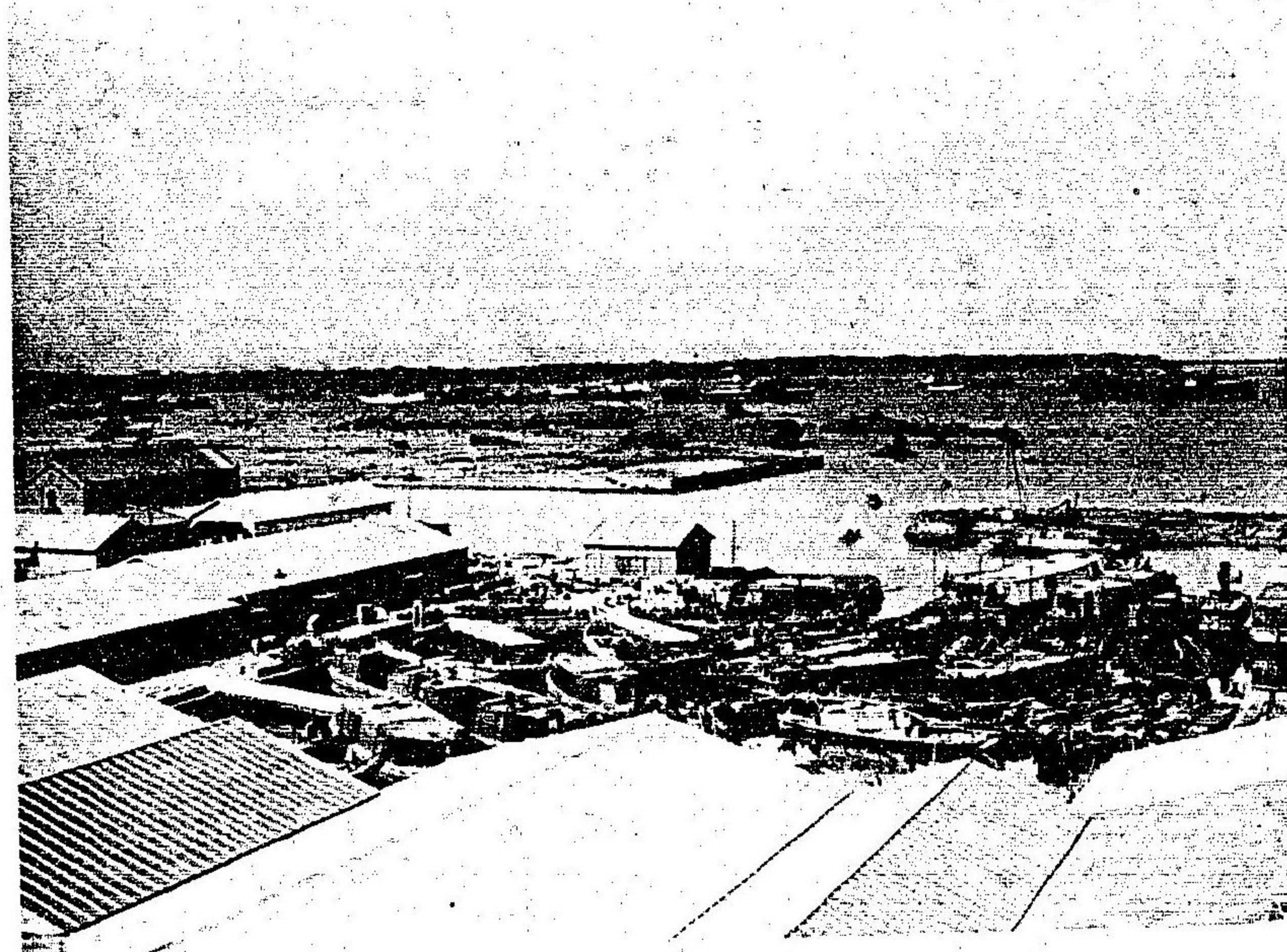


横濱港

神奈川縣武藏國久良岐郡横濱(東京灣内)

太平洋岸唯一ノ良港タル横濱ハ今ヲ距ル四十五年前即安
 政六年幕府ガ歐米諸國ト通商條約締結ノ際初メテ開港場
 ト定メラレタルノ地ナリ當時ハ實ニ寂寞タル一寒村ニ過
 キサリシモ外國貿易ノ發達ニ伴ヒ内外人ノ來住スル者日
 ニ多キヲ加ヘ現今ニ及ンテハ面積一方里六分余戸數五万
 七千五百余人口三十一万四千弱卅五年末調ノ一大市街ヲ
 爲スニ至レリ港區域ノ廣袤ハ市ノ面積ニ比シ遙ニ大ナリ
 其限界ハ本牧十二天ノ鼻ヨリ本牧燈船ヲ經テ鶴見川ノ吐
 口ニ至リ防波堤内ノ水面積ノミニテモ百六十七万坪ニ及
 ヒ昨卅六年ニ於テ出入ノ船舶六千二百四十八艘(内國船三六艘)
 噸數一二、八二六、三九八噸(輸入六、四五六、三〇噸)ヲ算シ輸出入價格
 二五七、四五九、四二〇圓(輸入一、〇八七、八八八圓)ニ達セリ
 港灣ノ設備トシテ政府ハ明治廿二年百十二万八千三百五
 十一圓餘ノ費額ヲ以テ延長一八、一七八呎(東水堤五、七三八呎)ノ防
 波堤工事ヲ起シ八年ノ星霜ヲ經テ之ヲ完成セルノ外三二
 九、〇〇〇圓ヲ費シテ巾六〇呎長一、八九五呎ノ鉄棧橋ヲ架
 設シ尙卅一年大藏省直轄ノ下ニ臨時稅關工事部ヲ置キ七
 ケ年ノ繼續事業トシテ二百三十余万圓ヲ投シ稅關附近ノ
 海面四万六千九百二坪ヲ埋立テ延長四百八十四間ノ繫船
 岸ヲ築造シ茲ニ京濱鐵道線路ヲ延長シテ水陸大聯絡ノ計
 畫ヲ立テ目下尙ホ其工事中ニ屬ス

港區域内ニ於ル航路ノ標識ハ東北兩水堤燈臺、本牧燈船、横
 濱燈竿及神奈川浮標ニシテ外ニ港務局ノ管轄ニ屬スル繫
 船浮標拾箇私立ニ屬スルモノ拾四箇アリ



試驗燈臺

武藏國橫濱市航路標識管理所内

試驗燈臺ハ航路標識管理所ノ西北隅ニアリ航路ヲ示ス燈火ヲ設クルニアラズ各燈臺ニ用フベキ器械、燈油其他各種消耗品ノ品質ヲ試驗シ看守ニ點燈器械、霧笛器械ノ取扱及ヒ氣象觀測法其他百般燈臺ニ於ル執務方法ヲ教授スル處ナリ

LABORATORY TOWER, LIGHTHOUSE BUREAU.

舊試驗燈臺ハ方形煉瓦石造ニシテ明治六年二月起工シ七年三月落成ス塔中教授用器械、試驗器械、觀測器械類ヲ備フ同廿年其基礎漸ク崩壞シ且燈籠ハ狹隘ニシテ現今ノ大レノズテ容ル、能ハザルヲ以テ新築ノコトニ決シ同卅二年九月起工翌卅三年十一月竣工シタリ新塔臺ハ煉瓦石造八角形ニシテ高サ基礎上面ヨリ頂上ニ至ル六十八尺餘塔ノ高サ四十八尺餘、燈籠ノ高サ十尺、十八邊形ニシテ長方形ノ張出ヲ設ケ上ニ起重器ヲ置キ塔ノ前面ニ煉瓦石造ノ事務室ヲ設ク

明治七年三月舊試驗燈臺成ルヤ同月十八日之ニ大吹埤燈臺ニ備フベキ第一等回轉器械ヲ裝置點燈シテ試驗ヲ行フ此日唇クモ我 天皇后兩陛下ノ車駕臨幸アリテ之ヲ觀覽アラセラレタリ



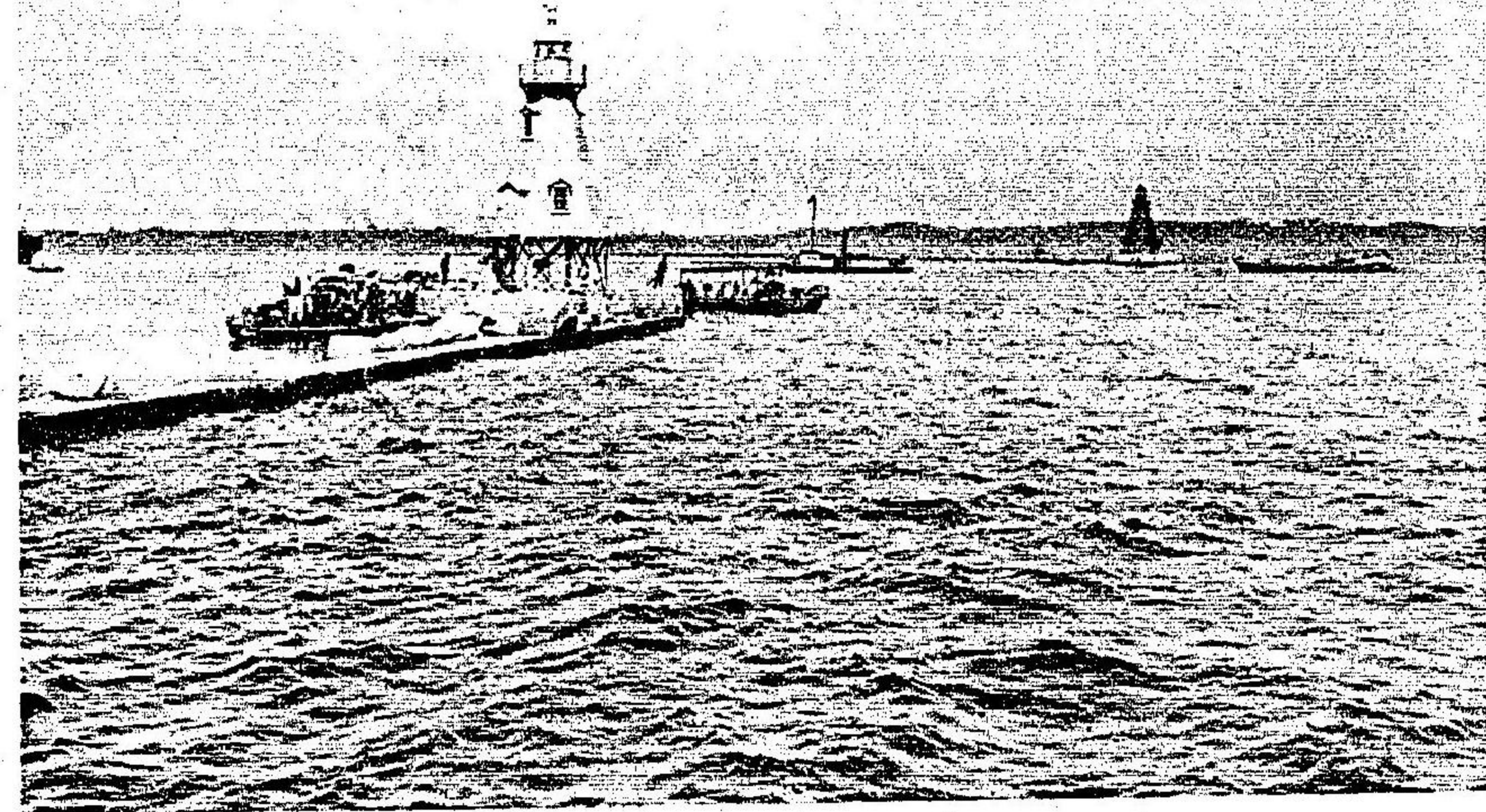
横濱東北兩水堤燈臺

武藏國横濱港水堤入口(東京灣内)

北緯 三五度二七分 自基礎至燈火 四十尺 光 力 百燭光弱
 東經 一三九度三九分 自水面至燈火 四十二尺 光達距離 七海里

明治廿九年横濱東北兩水堤略落成シタルヲ以テ其東水堤
 端ニ紅色其北水堤端ニハ白色鉄柱六角形ノ燈臺ヲ造リ兩
 燈共同一構造ニシテ上部ニ燈籠及ヒ當直室ヲ設ケ無等全
 度「レンズ」ヲ据ヘ燈臺ノ周圍ニ高サ四尺ノ「コンクリート」胸
 壁ヲ繞ラシ別ニ堤裏ニ船鉤ヲ樹テ艀船ヲ備ヘ此年四月ヨ
 リ點燈ス其工費一万八十一圓餘ハ横濱築港費ノ支出ニ係
 ル燈臺落成後横濱築港掛ヨリ引繼キ爾後本所ノ管理ニ屬
 ス

(備考) 本文中「自水面燈火」ハ「トアル」ハ大潮平均水
 面ヨリ燈火ノ中心ニ至ル高ヲ示セルモノナリ又
 一燭光トハ蠟燭ニ石蠟又ハ木蠟少許ヲ混シタル
 蠟燭ノ重量百二十「グレイン」ヲ一時間ニ消費スル
 光力ヲ云フ



羽根田燈臺

武藏國荏原郡羽根田洲外(東京灣内)

北緯 三五度三分 自其礎至燈火 五十三尺 光 力 百燭光
東經 一三九度四八分 自水面至燈火 四十四尺 光線距離 十一海里半

本燈臺ハ六郷河口ヲ距ル南約一海里餘ノ淺洲即チ圓山洲
高潮水深十三尺ノ地ニ在リ明治六年當時燈臺局雇英國技
師長「ブラント」ヨリ本燈臺ノ設計ヲ蘇蘭技師「ステブ」
ン氏ニ依頼シ同國ニテ製造セシメ同七年六月現位置ニ建
築シ八年三月落成點燈シタルモノナリ

本燈臺ハ六角形ニシテ鍊鉄柱(徑五寸)ノ下端ニ大螺旋(徑二尺)ヲ
附シ斜ニ砂中ニ挿リ込ミ其上部ニ寢室、當直室、燈籠ヲ据ヘ
始メハ燈臺ヲ白色ニ塗り四等不動綠色燈ヲ据ヘタリシガ
燈臺ト白帆ト動モスレバ誤認シ易キ虞アルヲ以テ九年十
二月燈臺ヲ黑白ノ横線塗ニ改ム蓋シ現今本邦ニ於ケル螺
旋柱ノ燈臺ハ唯此一アルノミ同三十年一月十七日劇烈ナ
ル地震ノ爲ニ從來ノ四等不動「レンズ」損傷シタルヲ以テ三
十三年四月五等白色ニ改メ明暗器(燈光發射ノ時間七秒)ヲ据ヘ付
タリ明暗器ノ構造ハ種々アレドモ此所ニ備フルハ時辰儀
器械ヲ以テ縱直ナル遮蓋ヲ燈火ノ周リニ回轉セシム恰モ
走馬燈ノ如キモノナリ

HANEDA LIGHTHOUSE (TOKYO BAY.)



HONMOKU LIGHTSHIP. (TOKIO BAY.)

本牧燈船

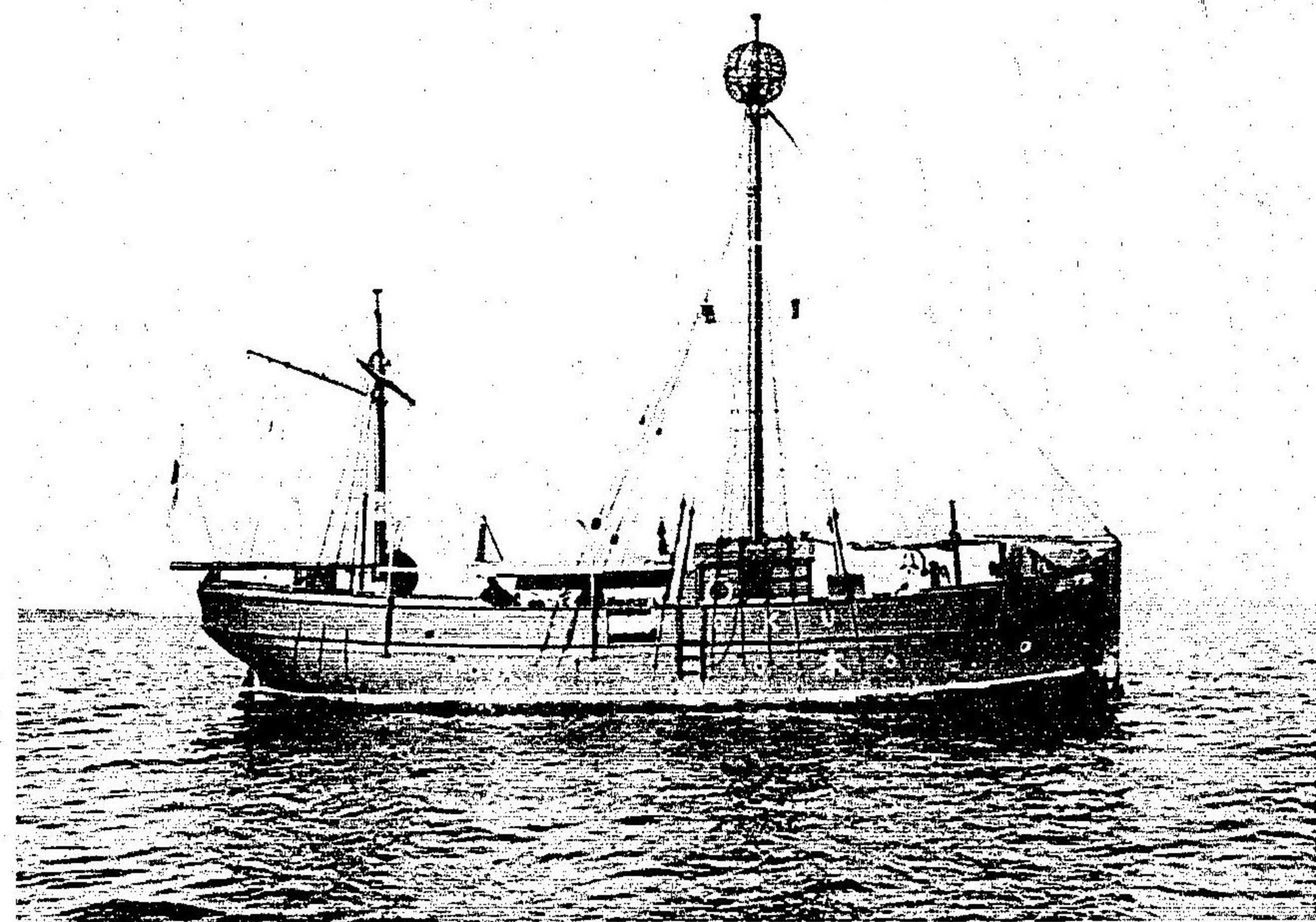
武藏國久良岐郡本牧鼻ノ洲外(東京灣内)

北緯 三五度二七分
東經 一三九度四一分

自水面至燈火 三十六尺

光力未詳
光達距離 十海里

本船ノ位置ハ觀音埼及ヒ横濱間ニ於ル航船ノ轉針スベキ
 處ニアリ慶應三年幕府歐米各國ト約シ撰定シタル燈臺位
 置ノ一ニシテ燈船ヲ置ク必要アルヲ以テ造船ニ着手シ明
 治元年十一月起工二年十一月落成シ現位置ニ碇置ス
 本船ハ木造紅色ノ二檣船ニシテ前檣ニ紅球ヲ掲ケ水面上
 三十六尺ノ所ニ不動紅色燈ヲ點ス同十五年四月五日霧鎖
 ヲ設ケ降霧其他冥濛ナル天候ニハ五分時毎ニ連打ス同十
 六年五月夜英國商船「ブレコンシアイル」號ニ衝突セラレ船
 腹ヲ破壊シ直ニ沈没セルガ當時乗組員船長始メ一同幸ニ
 負傷者ナカリキ因テ其附近ニ假燈船ヲ据ヘテ點火シ沈船
 ヲ引上ゲ五月豫備燈船ヲ舊位置ニ据ヘテ前ノ如クニ點燈
 シタリ此衝突事件ニ關シテハ後「ブレコンシアイル」號船主
 「デュンキンソン」社ヨリ償金八千弗ヲ徴シテ事全ク落着ス
 廿五年中(月下)從來使用シタル落花生油ハ冬期凝結シ光力
 弱キヲ以テ犬椎油ニ變更シタリ



觀音埼燈臺

相模國三浦郡浦賀町(東京灣口)

北緯 三五度一五分 自基礎至燈火 四十尺 光力一千七百五十燭光
東經 一三九度四五分 自水面至燈火 百七十八尺 光達距離 十七海里

觀音埼ハ東京灣咽喉ノ地ナルヲ以テ幕府ノトキ己ニ燈明臺ノ設ケアリテ(享保七年)浦賀奉行之ヲ管理セリ其後慶應二年五月十三日所謂江戸條約ナルモノニ因リ我政府ハ外國貿易ノ爲メ開キタル各港船舶出入安全ノ爲メ西洋形燈臺ヲ設クルコト、ナリ當時之ガ爲メ撰定シタル位置ハ觀音埼、野島埼、神子元島、檜野埼、湖岬、佐多岬、伊王島ノ八燈臺及函館本牧ノ二燈船ニシテ乃テ本燈臺ノ如キモ其一ニ係ル因テ幕府ハ横須賀造船所備佛國技師「ウエルニ」ニ命シ其設計ニ基キテ起工シ明治二年正月元日點燈ス本邦ニ於ケル洋式燈臺ノ濫觴トス

燈塔ハ白色方形ニシテ官舎ト共ニ煉瓦石造、「レンズ」ハ佛國「ペンリー、レボ」會社ノ製造ニ係リ第三等不動白色燈ナリ又三年十二月本燈ニ紅色硝子板ヲ挟ミテ海嶺島ノ危險ヲ標示ス又燈臺ニ於テ昔テ紅色副燈ヲ設ケテ富津洲及其浮標ノ位置ヲ照シタルモ富津燈竿ノ建設ト共ニ之ヲ廢止シタリ



劍 崎 燈 臺

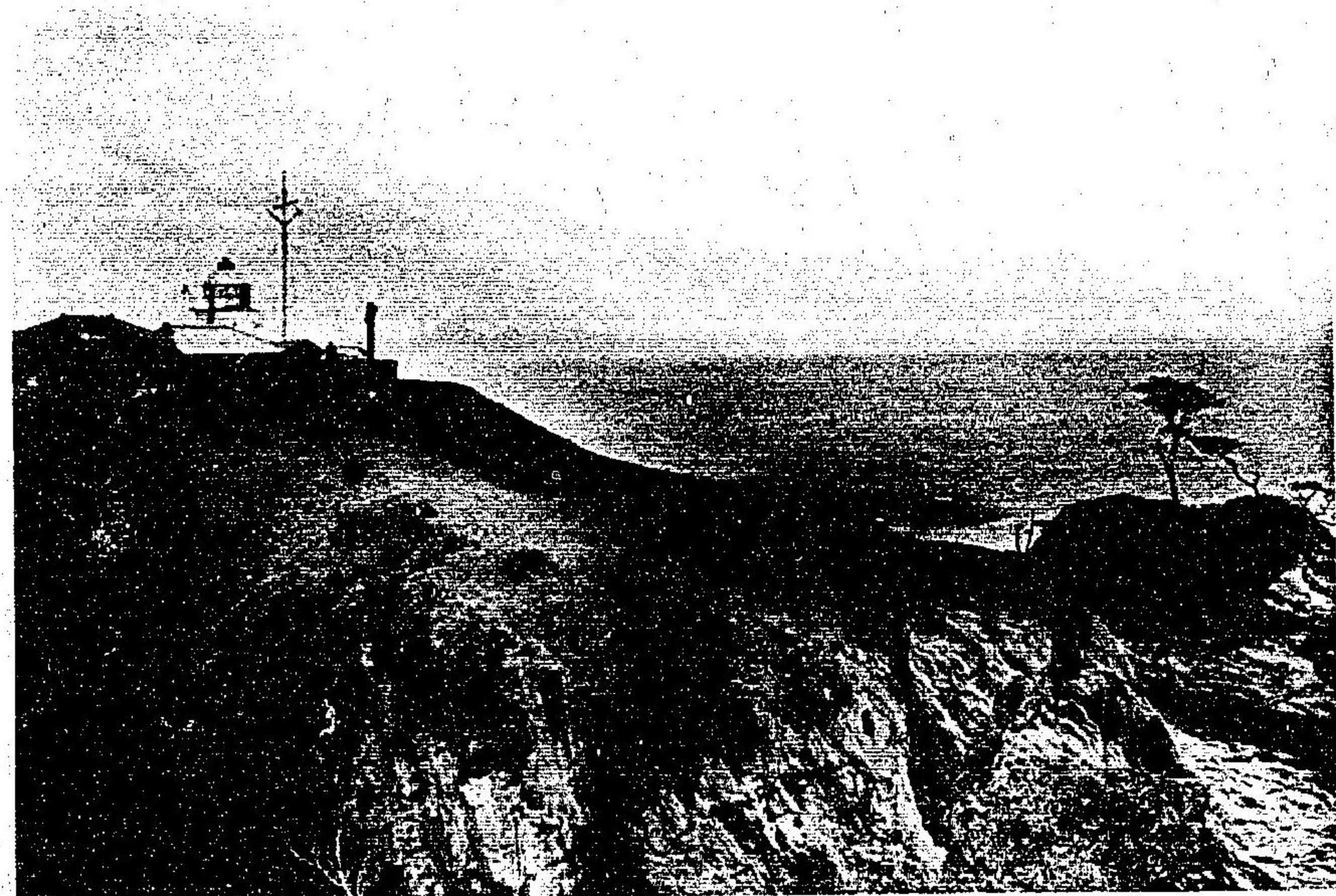
和模國三浦郡南下浦村(東京灣口)

北緯 三五度九分 自基隆至燈火 廿五尺 光 力 四千燭光
東經 一三九度四一分 自水面至燈火 百十尺 光達距離 十六海里半

本燈臺ハ觀音崎ノ南八海里ニアリ江戸條約ニ基キ明治三年二月起工明治四年正月點燈ス燈器ハ「ステブソン」氏ノ「ホロホー」ト「反照鏡廿壹個ヲ停振盤上ニ据ヘ回轉器械ヲ以テ之ヲ回轉スル方法ナリ

四年正月紅色硝子板ヲ燈籠ニ取付ク海嶺島ヲ標示スルハ觀音崎燈臺ニ同シ又近時電信局ヲ此燈臺ニ開設セラレ入港ニ先タチ其船舶ノ通過ヲ知ルノ便アリ

豆和地方ハ古來地震多キ所ナルヲ以テ廿一年帝國大學ノ依頼ニ應ジ本燈臺及觀音崎燈臺ヘ地震器械ヲ据付ク地震ノ都度觀測シテ之ヲ大學ニ報告セリ然ルニ觀音崎ニ据付タル地震器ハ其後破損セルヲ以テ目下其報告ヲ廢止セリ



城ヶ島燈臺

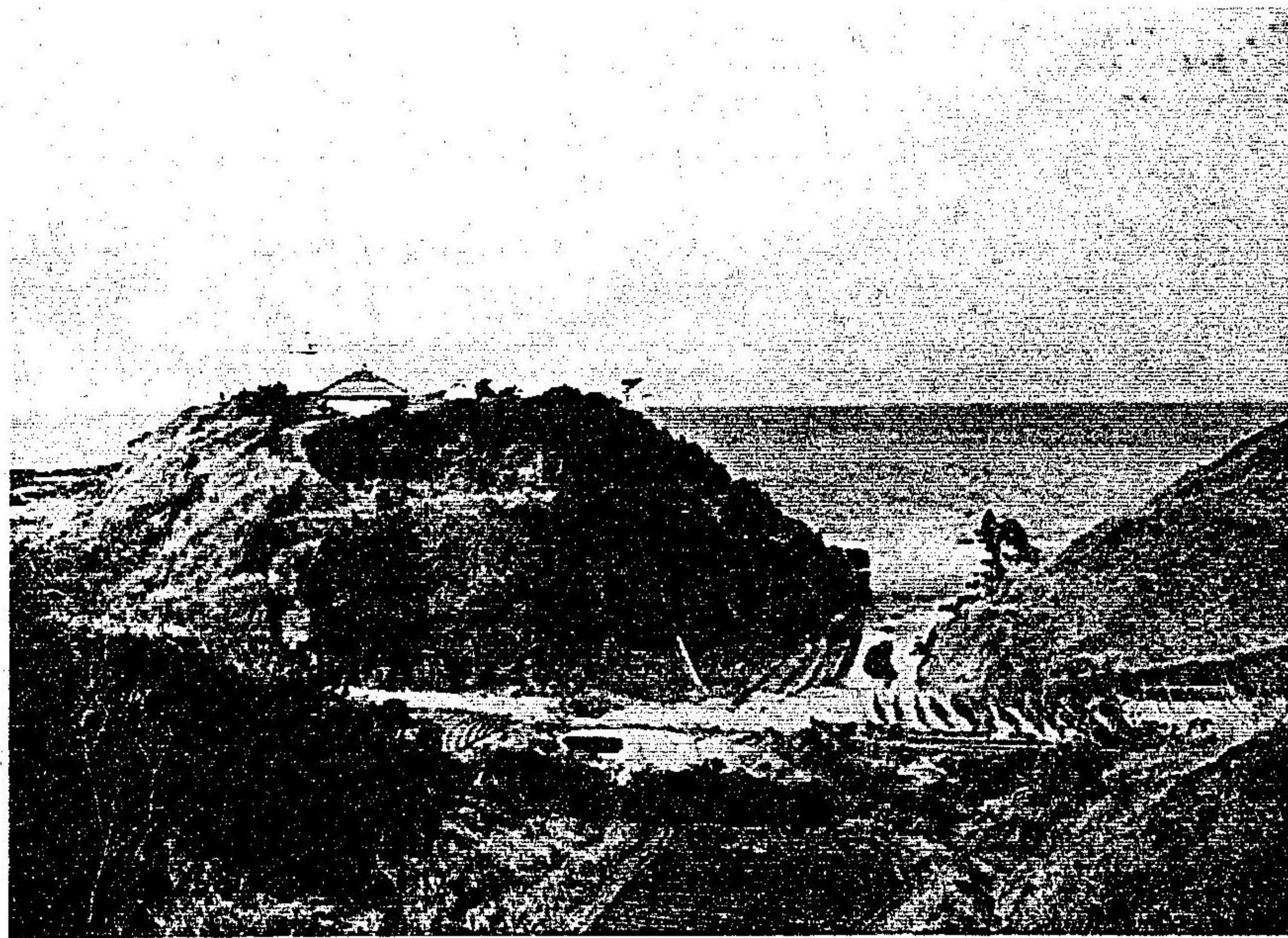
相模國三浦郡三崎町城ヶ島西端(相模灘)

北緯 三五度 八分 自燈臺至燈火 十九尺 光 力 百燭光弱
 東經 一三九度 三七分 自水而至燈火 百〇六尺 光達距離 八海里半

本燈臺ハ御崎ヲ距ル三海里強ニシテ慶應年中幕府横須賀造船所備技師「ウエルニ」ニ命ヲ洋式燈臺ヲ舊箭屋ノ位置ニ建設セシメタルニ戊辰兵亂ノタメ其着手ヲ遅延シ明治二年二月起工三年八月點燈同年十二月落成シタリ

塔ハ圓形煉瓦石造白色ニシテ當初ハ五等不動白色燈ナリシガ八年十一月其白色ヲ綠色ニ改メタリ

因云城ヶ島ハ相模三崎港ノ前面ニアリ三崎ハ古來船舶幅輦ノ泊地ナルモ「イシマ」瀬其他暗礁多キヲ以テ慶安元年城ヶ島安房崎ニ燈明堂ノ建設アリ其腐朽スルニ及ビ延寶六年三崎奉行ニ於テ城ヶ島字西山ニ燈明堂ヲ建設シタルモ極メテ粗造ニシテ其後享保五年ニ及ビ船舶ノ請ヲ容レ燈明堂ヲ廢シ箭屋ヲ設ク箭屋ハ木造土塗ニシテ四壁ヲ設ケズ箭火ノ燃料ハ松材ナリシト云フ



神子元島燈臺

伊豆國賀茂郡下田沖ノ一島(伊豆海)

北緯 三四度三四分 自基礎至燈火 六十尺 光 力 六千五百燭光
 東經 一三八度五七分 自水面至燈火 百六十四尺 光達距離 十九海里半

神子元島ハ伊豆下田港ノ南約六海里ニ在ル孤島ニシテ其
 周圍十二町餘近傍險礁散在シ東京灣出入ノ船舶ニ對シ危
 險ナルノミナラズ下田ハ船舶避泊ノ要地ナルヲ以テ明治
 二年三月起工シ四年二月竣工ス其間一時假燈ヲ點シ三年
 十一月本器械ニ改メテ點燈セリ
 燈臺ハ石造ニシテ島中ノ最高所海面上約百尺ノ地ニ在リ
 テ總高七十二尺五寸燈籠中ニ停振盤ヲ据ヘ反照鏡廿八個
 テ入ル官舎ハ燈臺ノ北方低所ニ在リ南風強烈ノ際ハ波濤
 官舎ノ屋ヲ打ツ現ニ廿三年及卅年ノ如キハ暴風激浪ノ爲
 メ大害ヲ蒙リ貯水所及信號所ヲ破壊セララル十六年六月反
 照鏡廿八個ヲ廢シ一等白色不動燈ニ交換シ十七年八月燈
 臺ノ塗色白色ナルヲ二條ノ黒横線ニ改ム本燈臺ハ難場燈
 臺ノ一ニシテ陸地トノ交通不便ナルヲ以テ島中ニ號球ヲ
 置キ毎日二同時ヲ定メテ高シ黒球ヲ吊上ケ島中ノ安否ヲ
 下田ノ看守人ニ報セシメ在勤看守ニハ一ヶ月七十二時間
 ノ陸地退息ヲ特許シ又醫療用藥品ヲ備ヘタリ



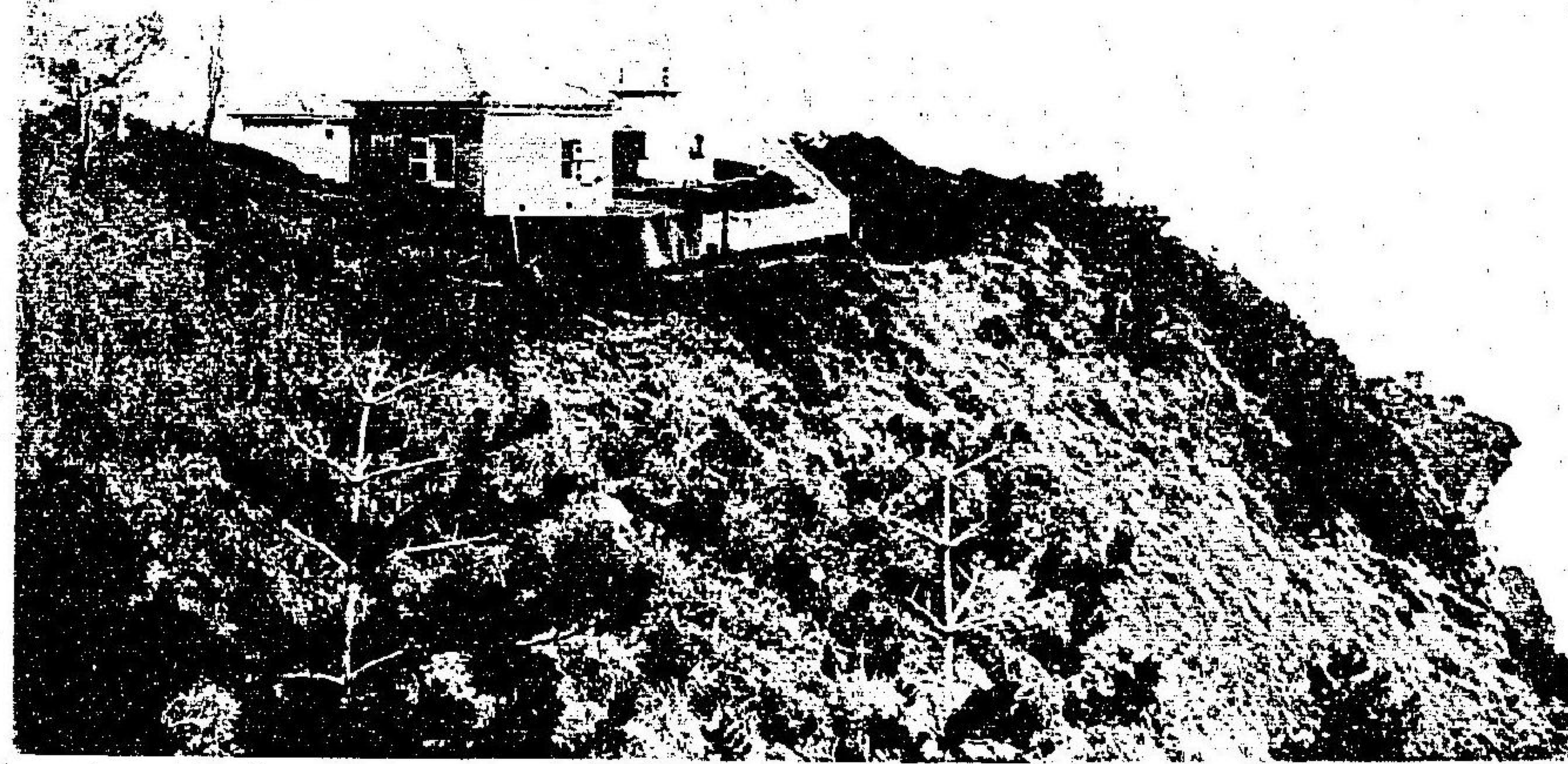
IROZAKI LIGHTHOUSE. (IDZU SEA.)

石室崎燈臺

伊豆國賀茂郡南崎村(伊豆海)

北緯 三四度三六分 自基礎至燈火 二十尺 光 力 百燭光弱
東經 一三八度五十分 自水面至燈火 百八十五尺 光達距離 十二海里

石室崎又石廊崎ト云フ伊豆ノ南端ニシテ崎傍ニ小澳アリ
長津呂灣ト云フ澳ヲ繞テ斷崖絶壁詩人之ヲ小赤壁ト呼フ
蓋シ一奇觀ナリ往時下田港ト共ニ和船避泊ノ要地タリ
寛永十三年幕府此ニ燈明堂ヲ設ク後山代官所管ニ屬シ
明治ニ及レテ山縣所管ニ移ル偶々英國軍艦セルビヤ號
艦長ヨリ其燈火ト神子元燈火ト誤認シ易シト報告シタル
ヲ以テ燈臺寮ヨリ山縣ニ此燈明堂ヲ廢止スベシト照會
シタルニ同縣ヨリ之ヲ廢止セバ日本船ノ示導ヲ奪フニ似
タリ宜シク各國ニ布告シ之ヲ存スベシト回答シ來リシカ
バ再議ノ後洋式燈臺ニ改造シ佐多岬燈臺ニ用ヒタル假燈
器ヲ裝置スルコトニ決シ明治四年四月起工八月點燈シタ
リ燈臺ハ木造八角形白色ニシテ六等不動紅色燈ヲ點シタ
ルモ其後五等紅色不動燈ニ改ム



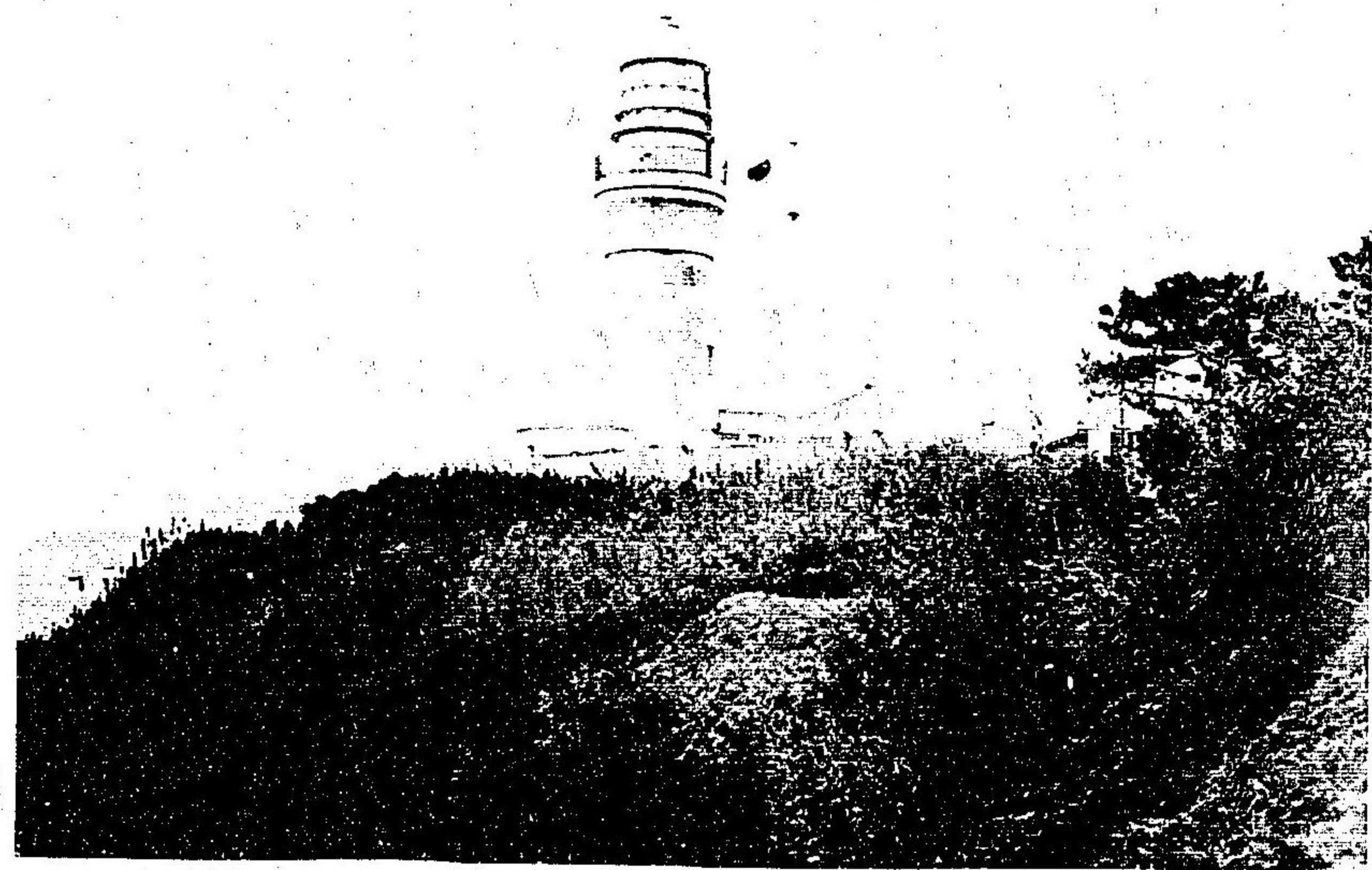
御前埼燈臺

遠江國榛原郡御前埼村(遠洲灘)

北緯 三四度 三六分 自基礎至燈火 五十七尺 光 力 六万七千五百燭光
 東經 一三八度 一四分 自水面至燈火 百七十三尺 光達距離 十九海里半

本燈臺ハ遠江ノ東角ニアリ東方海上二海里ノ所ニ御前岩ト稱スル伏礁アリ滿潮僅ニ水面ニ露ハル而シテ其岩ト海岸ノ間ニ尙ホ能岩、海老根、鯨根、等ノ五礁散點シ危險ノ地ニシテ古來座擡スルモノ甚ダ多シ加之難船ノ物品ヲ掠奪スルノ陋習アリ寛永十二年幕府此所ニ燈明堂ヲ設ケ中泉ノ代官ヲシテ之ヲ管理セシメ明治七年迄繼續シタリ五年五月舊燈明堂所在地ヲ擴張シ塔址ヲ置キ七年五月落成シ同年一月一日ヲ以テ舊燈明ヲ廢シ新燈臺ニ點燈セリ

燈臺ハ煉瓦石造ニテ總高七十二尺燈器ハ反射玻璃ニシテ三十秒時間ニ一閃光ヲ發スル舊式八面構造ノ器械ナリ



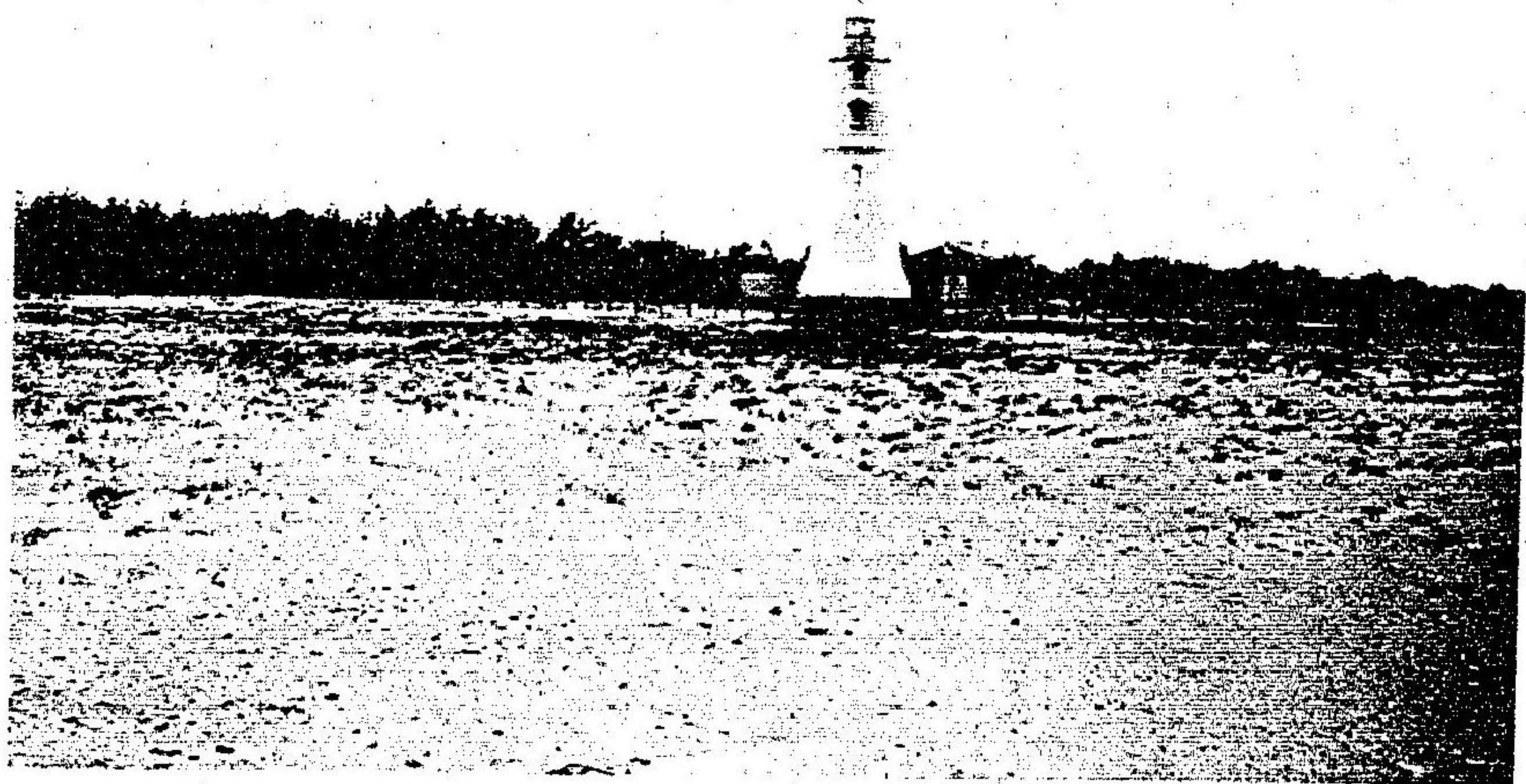
掛塚燈臺

遠江國磐田郡補浦村(遠洲灘)

北緯 三四度 三九分 自基礎至燈火 四十八尺 光 力 百燭光
東經 一三七度 四九分 自水面至燈火 五十五尺 光遠距離 十二海里

遠江國天龍川ハ東海屈指ノ巨川ニシテ絶ヘズ水源ヨリ流下スル木材ハ一ニ皆其河口ニ幅濶シ以テ四方ニ輸出スルモノナルヲ以テ船舶ノ出入甚ダ多ク然ルニ砂洲海面ヨリ遠ク二海里ニ延亘シ殊ニ其急流奔瀾ノ末ヲ受テ古來船舶座觸ノ災ニ罹ルモノ揚ナカラズ土地ノ篤志家荒井信敬ナルモノ深ク之ヲ憂ヒ苦辛經營ノ末漸ク木造ノ一小燈臺ヲ其河口ニ私設スルヲ得タリ是レ明治十三年中ノコト、ス然ルニ其後十八年八月一般燈標ノ私設ヲ禁セラレ既設燈標ニシテ船舶ヨリ其費用ヲ徵收スルモノ、外一切廿八年ヲ限リ廢止スルコト、ナリ之ガ爲メ此私設燈臺モ亦同年ヲ限リ廢止ニ歸スベキ所建設以來船舶ニ便宜ヲ與ヘ難破ノ災ヲ避ケンメタルモノ揚ナカラザルヲ以テ一時村費ヲ以テ公設スルヲ許可セラレ同卅年從前ノ位置ニ六等不動白色燈ヲ建設シ三月ヲ以テ點燈セリ

備考(大山燈臺)三河國南端伊豆湖崎近傍ハ伊勢灣口ニアリ古來船舶難破ニ罹ルモノ多ク加之土俗卑陋難船ノ物品ヲ掠奪シテ生テ營ムモノアリ甚シキハ故意ニ虛偽ノ燈火ヲ掲テ船舶ヲ陷レ利ヲ圖ルモノアリ明治ノ盛時ト雖モ尙其餘弊ノ俄ニ洗滌スル能ハザルモノアリト見ヘ明治十八年中三河國渥美郡越戸村ノ人民六十餘人難船ノ物品ヲ掠奪スルノ故ヲ以テ罪科ニ問ハレタルヲアリ爾後土地ノ有志家燈臺ヲ其地ニ建設シ被船ノ虞ヲ絶チ以テ村民ノ弊ヲ矯メンヲ欲シ石坂某之ガ爲ニ協力シテ鐵金ヲ募集シ廿一年八月木造燈臺ヲ建設シ六等不動白色燈ヲ點シ村費ヲ以テ維持シタルモ惜ムベシ其維持ノ困難ノ爲メ廿八年十一月遂ニ之ヲ廢セリ

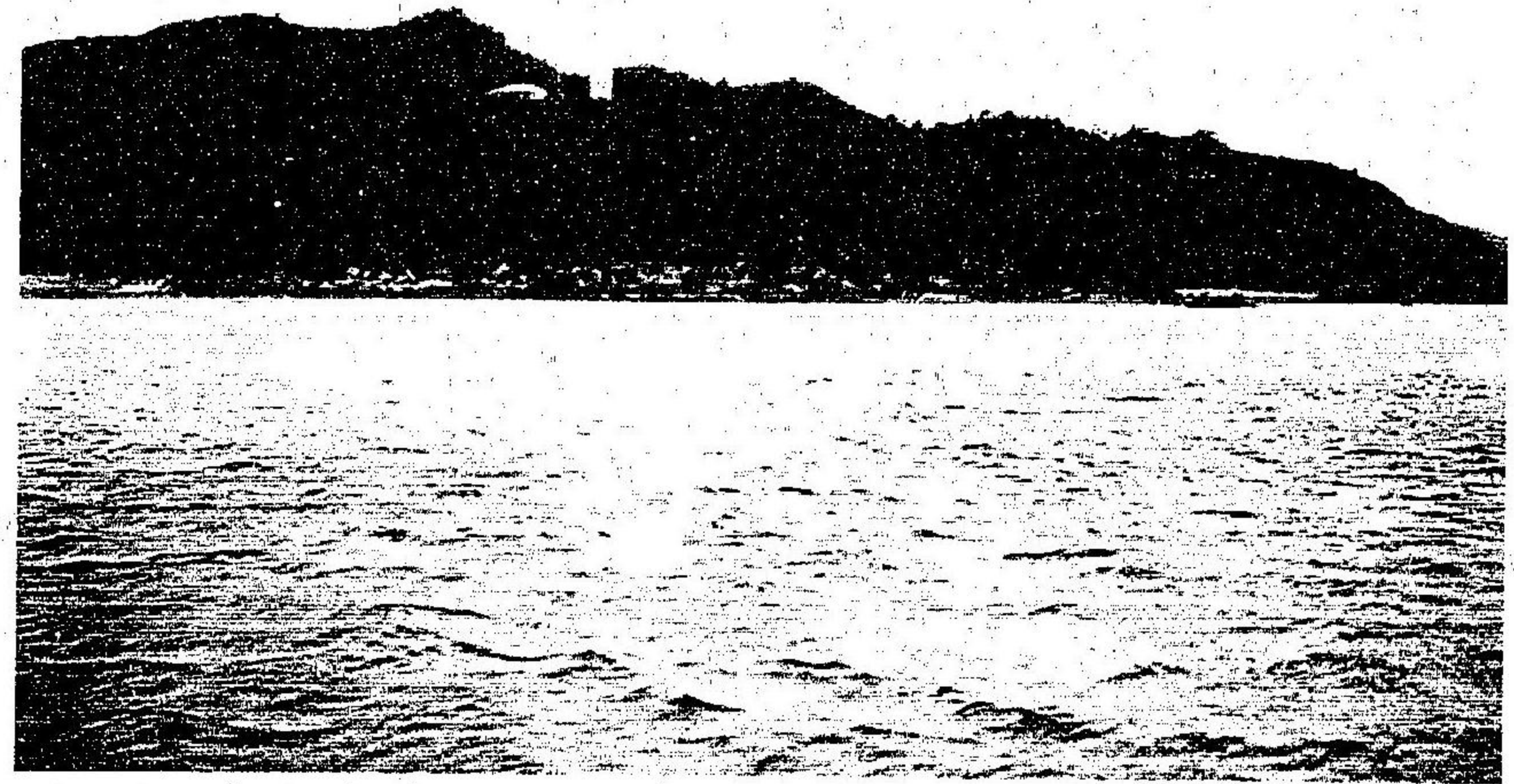


菅島燈臺

志摩國志摩郡答志村(伊勢灣口)

北緯 三四度 三〇分 自基礎至燈火 二十八尺 光 力 五百燭光
 東經 一三六度 五四分 自水面至燈火 百七十六尺 光達距離 十六海里

菅島ハ鳥羽港門ニアリ近傍數里ノ間險礁散點ノ危地ナレ
 ドモ一ニ風候ニ頼ル和船ニ於テハ必經ノ泊地ナリ寛永年
 間幕府ニ於テ小燈明堂ヲ設ケタリシガ寛文十二年幕吏河
 村端賢與羽織船ノ漕道ヲ制定スルニ方テ本島白埼山腹ニ
 燈火ヲ舉グルコトニ改メ菅島羽藩ナシテ之ヲ維持セシメ
 維新後猶ホ繼續シタリシガ明治五年正月起工全年七月點
 燈シタリ
 燈臺ハ圓形白色煉瓦石造ニシテ四等白色不動燈ヲ點ス



安 乘 崎 燈 臺

志摩國志摩郡安乘村(伊勢灣口)

北緯 三四度 二二分 自基燈至燈火 三十六尺 光 力 四千燭光
東經 一三六度 五四分 自水面至燈火 百〇二尺 光達距離 十六海里

安乘崎ハ的矢港門ニアリ和船必經ノ地タリ港門彌右衛門
出シ其外數礁碁布年々ノ破船二十艘ヲ下ヲズ土民其物品
ヲ掠奪スルノ陋習アリ幕吏河村端賢漕政ヲ釐革スルニ方
テ此地ニ烽火舎ヲ設ク實ニ延寶元年ナリ寛永年間ニ至テ
該地回船問屋協同出資シテ之ヲ維持シタリシモ明治四年
ニ至テ廢絶シタリ是年九月舊烽火舎ヲ毀テ松樹ヲ伐除シ
平地三百四十余坪ヲ拓キ木造白色八角形ノ燈臺ヲ建設シ
五年七月假燈ヲ點シ九月落成ス六年四月一日英國ニ注文
シタル燈籠器械ノ到着セシヲ以テ之ヲ据付ク即夜點燈ス
白色四等回轉燈ニシテ三十秒時ニ一光ヲ發ス

(備考)大正時ト櫻野崎ノ間ニ於テ黒潮逆流ノ爲ニ陸岸ニ
艦セラル、モノ屢々アリ殊ニ濃霧ノ際其害ニ陷ル
モノ甚シトヘス前年土國軍艦ノルマントノ號其慘
禍ニ罹リ溺死約百六十人ヲ出セリ故ニ三木崎ノ邊
ニ強烈ノ燈光ヲ置クノ必要アリ目今扼取崎ノ村立
燈臺ハ大ニ其災懼ヲ薄フスル効アルモノト云フベ
シ

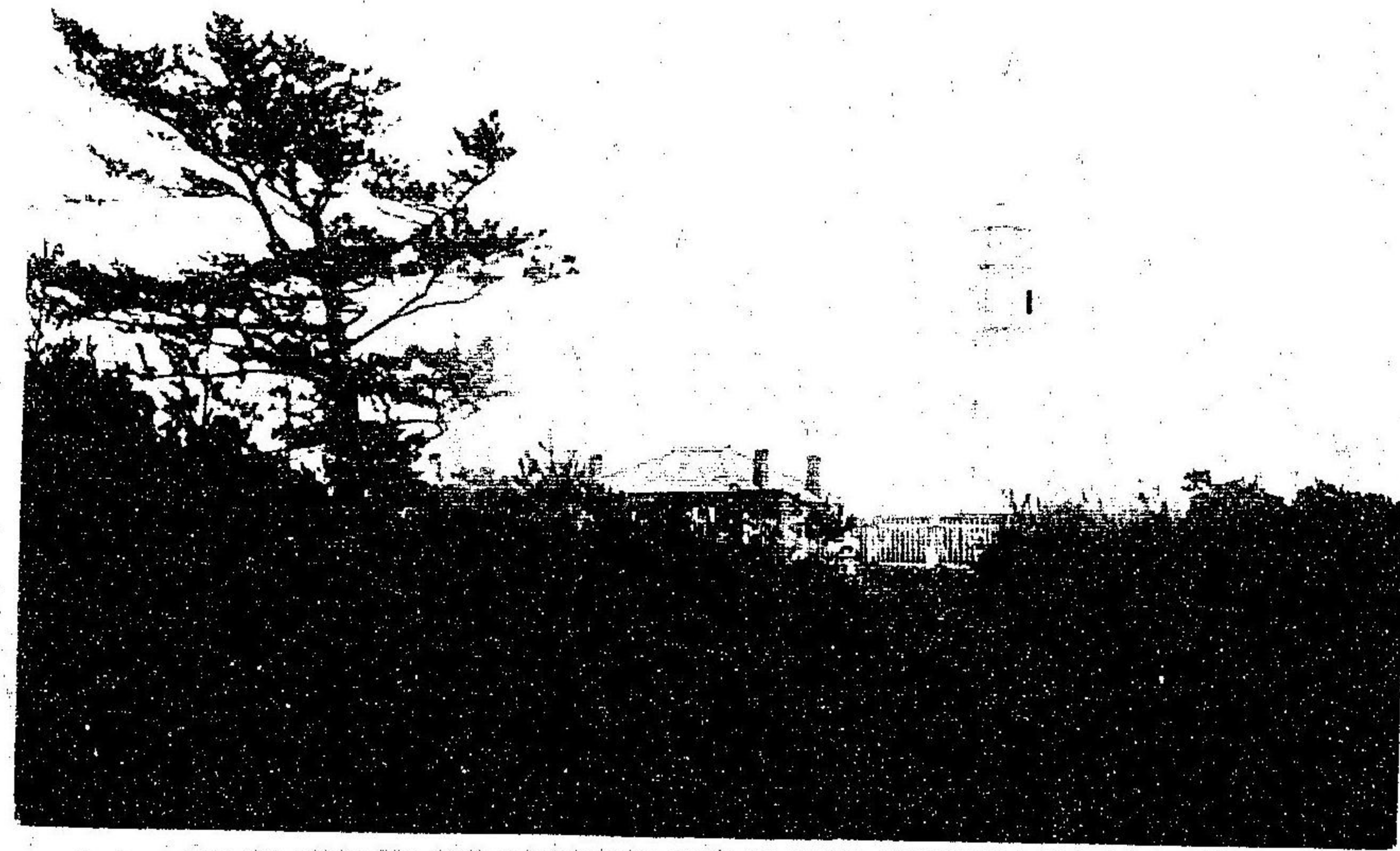


本燈臺ハ紀伊國ノ南端ニアリ所謂江戸條約ニ據テ撰定シタル位置ナリ明治二年三月建築ニ着手シ海面ヨリ高キ約百尺ノ地ニ熊野神社ヲ鎮シタル地最モ燈臺ノ位置ニ適セルヲ以テ其地ヲ買上ケ神社ヲ近傍ニ移シ木造假燈臺及ヒ石造官舎附屬舎ヲ建築シ三年六月ヲ以テ之ヲ點燈ス六年九月其燈籠内ニ新着ノ十八箇ヨリ成ル反照器ヲ据付ケ燈點ス其中木造假燈臺漸シ腐朽シタヲ以テ十一年六月石造ニ改メ之ニ燈籠及ヒ燈器ヲ移シテ點燈シタリ

因云古來熊野地方ハ鰹漁ヲ以テ名アリ本燈臺建築ノ事起ルヤ漁民其燈明ハ鰹漁ニ害アリト妄想シ苦情百出該建築ヲ中止セシメテ訴ヘタルモ固ヨリ聽許スベキニアラザレバ其儘建築ヲ續ケ漸ク竣工點燈シタルニ偶々其年鰹大漁ニ當リ爲ニ苦情ノ聲ヲ絶テタリト云フ各地燈臺ノ建築ニ方リテ土地漁民ニ往々類似ノ苦情アリ前年室戸崎燈臺建築ノ場合ニモ此事アリシモ此等妄想ハ燈明ト共ニ煙消スルヲ常トス

潮岬燈臺 紀伊國西牟婁郡潮岬村(紀洲灘)

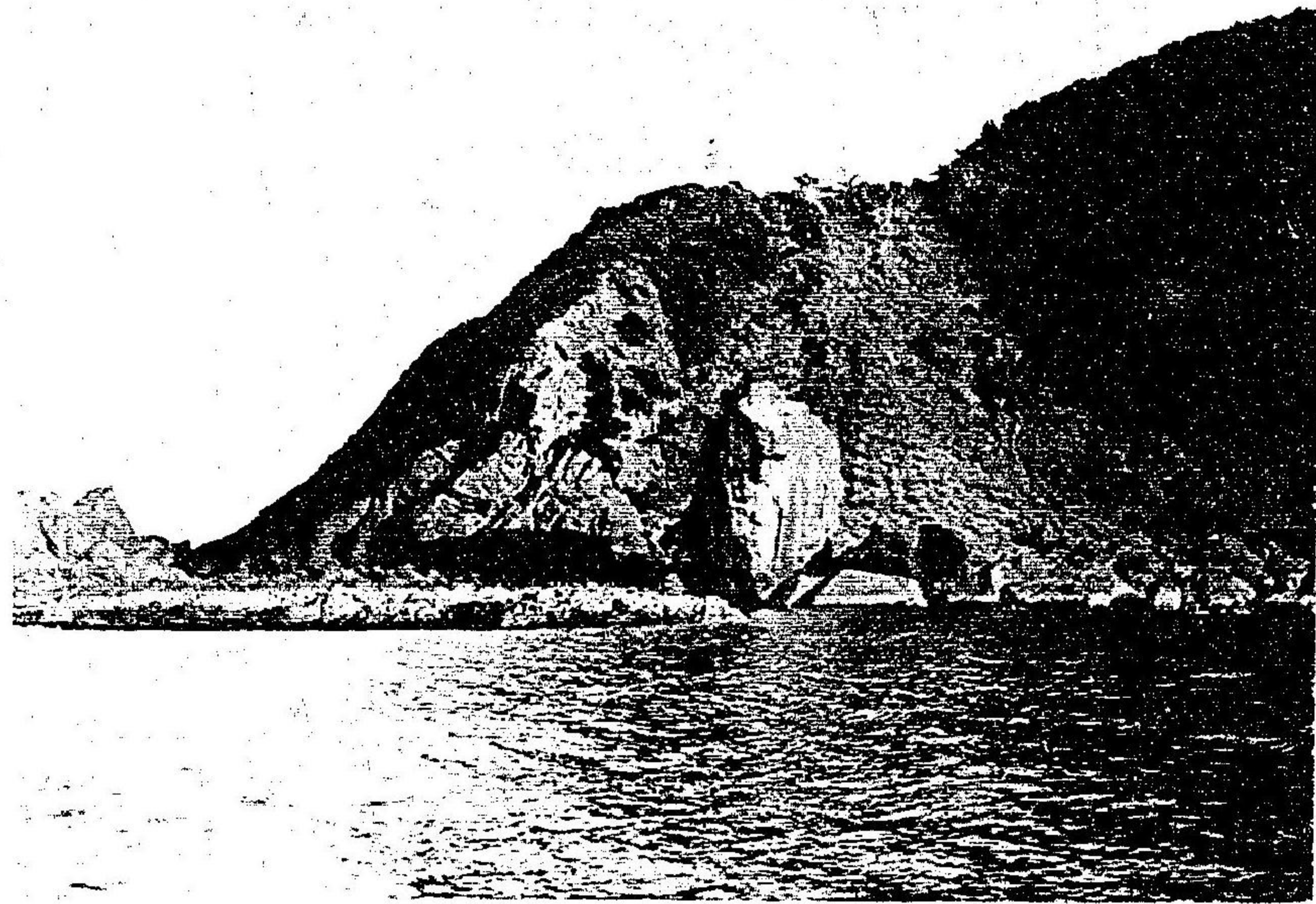
北緯 三三度 二六分 自基礎至燈火 六十三尺 光力 千二百五十燭光
東經 一三五度 四五分 自水面至燈火 百六十三尺 光達距離 十九海里



日御崎燈臺 (紀伊國日高郡三尾村(紀伊水道))

北緯 三三度 五三分 自基礎至燈火 三十一 五尺 光 力 三万六千燭光
東經 一三五度 三分 自水面至燈火 二百六十一尺 光達距離 二十三海里

本地ハ紀淡海峽ノ入口ニ斗出シタル一角ナリ船舶其方針ヲ轉スルノ地ニシテ昔時嘗テ烽火ノ設ケアリシト云フモ廢絶久シク燈臺ノ標的ナク暗夜冥濛ノ天候船舶航路ニ迷ヒ往々礁觸膠擱ノ患ニ罹ル前年英國漁船ベチシヤ號ノ如キ其慘例ノ一トス因テ明治廿七年鉄造白色圓形ノ燈臺ヲ新築シ廿八年一月ヲ以テ二等回轉白色燈ヲ點シタリ



苦ケ島燈臺 紀伊國海草郡加太村(紀淡海峽)

北緯 三四度 一七分 自基燧至燈火 三十一尺 光力 千七百五十燭光
東經 一三五度 〇分 自水面至燈火 百九十四尺 光達距離 二十海里

紀淡海峽中間ニ二箇ノ島嶼ノ相並フアリ一チ地ノ島他チ
沖ノ島ト云フ苦ケ島一名友ケ島)ハ以上二島ノ總稱ナリ沖
ノ島ト淡路ノ間ハ甚ダ廣ク大船通航ノ途ナルヲ以テ燈臺
ハ同島ノ西端ニアリ明治三年四月起工五年六月ヲ以テ點
燈ス
燈臺ハ圓形石造白色ニシテ燈器ハ三等不動白色ナリ廿三
年中此地ニ砲臺ヲ建築セラル、ニ由リ是年二月假燈ヲ設
ケ燈臺及官舎共移轉改築シ全八月點燈シタリ



TENPŌZAN LIGHTHOUSE (OSAKA BAY.)

本燈臺ハ攝津國西成郡安治川口天保山砲臺ノ一隅ニアリ
 延寶年中幕府淀河ヲ改修シ新ニ河道ヲ鑿テ海ニ通テ工事
 設計者河村瑞賢安治ノ名ヲ採テ安治川ト名ケ土砂ヲ川口
 ニ堆積シ以テ川口ノ目標トナシタリ天保年中其土砂ヲ崩
 シ砲臺ヲ築キ爾後之ヲ天保山ト云フ明治三年九月横濱ニ
 於テ木造燈臺ヲ組立テ四年正月之ヲ大坂ニ運搬建造シ同
 八月ヲ以テ四等不動白色燈ヲ點シタリ廿七年中燈臺及ヒ
 官舎ヲ改築シ卅二年十一月明弧ヲ變更ス
 大坂ハ古來工商業ノ中心ニシテ内外ノ貿易亦隨テ盛大ナ
 ルヲ以テ明治三十年大坂築港事務所ヲ設ケ工事ヲ起シ天
 保山燈臺ノ東方ニ二條ノ突堤(南突堤一四三八間餘 北突堤一五三〇間餘)及ヒ八百廿間
 ノ内港防波堤ヲ築キ突堤内陸地ニ接スル水面廿二万八千
 余坪ヲ埋立テ茲ニ延長約七千二百間ノ繫船岸及ヒ二百五
 十間ノ棧橋ヲ築造シ自餘ノ水底ヨリ百六十二万九千三百
 五十八坪ノ土量ヲ浚渫シテ最干潮面廿八尺ノ水深ヲ保タ
 シメ大船巨舶ヲシテ自由ニ出入スルヲ得セシメントセリ
 工事ハ未ダ完成セザルモ水陸ノ聯絡器械的ノ施設全備ス
 レニ及ンデハ日本第一ノ良港トシテ東西貨物ノ集散ニ一
 新生面ヲ開クヤ疑ヲ容レザルトコロナリ

天保山燈臺

攝津國大坂市西區天保町(大坂灣)

北緯 三四度 三九分 自基塔至燈火 三十尺 光力 五百燭光
 東經 一三五度 二六分 自水面至燈火 五十二尺 光達距離 十二海里



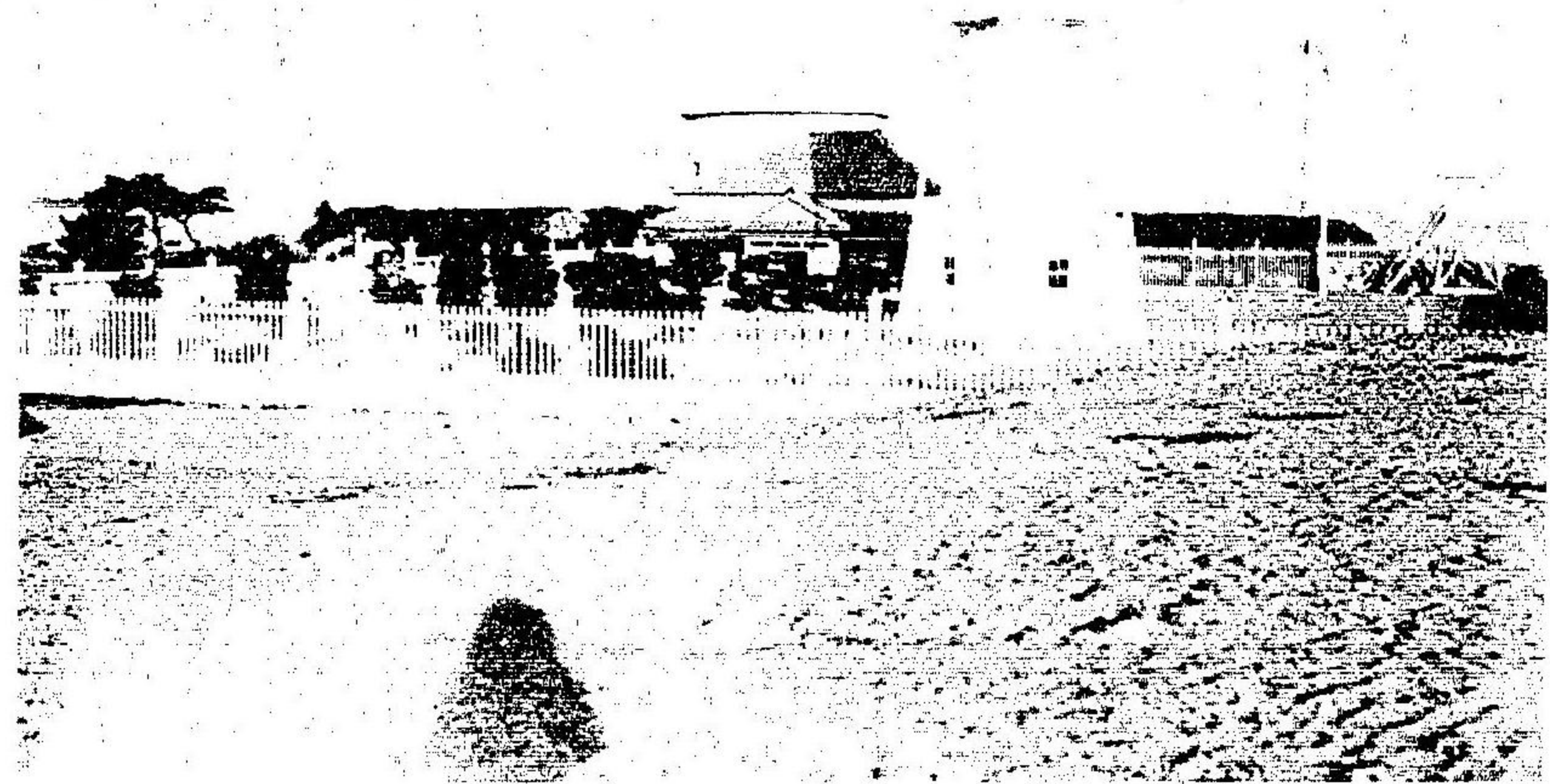
和田岬燈臺

攝津國神戸市兵庫港(大坂灣口)

北緯 三四度 三九分 自基礎至燈火 四十六尺 光 力 二百燭光
東經 一三五度 一分 自水面至燈火 五十二尺 光達距離 十二海里

和田岬ハ攝津國兵庫港ノ西ニアリテ海中ニ斗出シタル地
 ナリ慶應三年四月幕府大坂ニ於テ歐米各國ト約シ兵庫ヲ
 以テ貿易地ト定メタルニ由リ内海所々ニ燈臺ヲ建設スベ
 キノ必要起リ明治二年備英國技師長ブランドンチシテ其
 位置ヲ撰定實測セシメタルニ江戸條約ニ據テ撰定シタル
 拾ヶ所ノ外天保山、苦々嶋、和田岬、江崎、今治附近(後對島、廣島ニ改ム)、
 部崎及ヒ六連島ノ八個所ニ燈臺ヲ新設スベシト報告セリ
 斯ニ於テ三年九月和田岬舊砲臺ノ傍ニ於テ木造燈臺ヲ建
 築シ四年四月落成假燈ヲ點シ五年八月四等不動紅色燈ニ
 改メタリ十七年三月木造燈臺腐朽シタルヲ以テ白色鐵造
 六角形ノ燈臺ニ改メ舊燈籠及燈器ヲ之ニ移シ三月ヲ以テ
 點燈ス

廿三年七月神戸港内ヲ照スタメニ明弧ヲ擴張ス



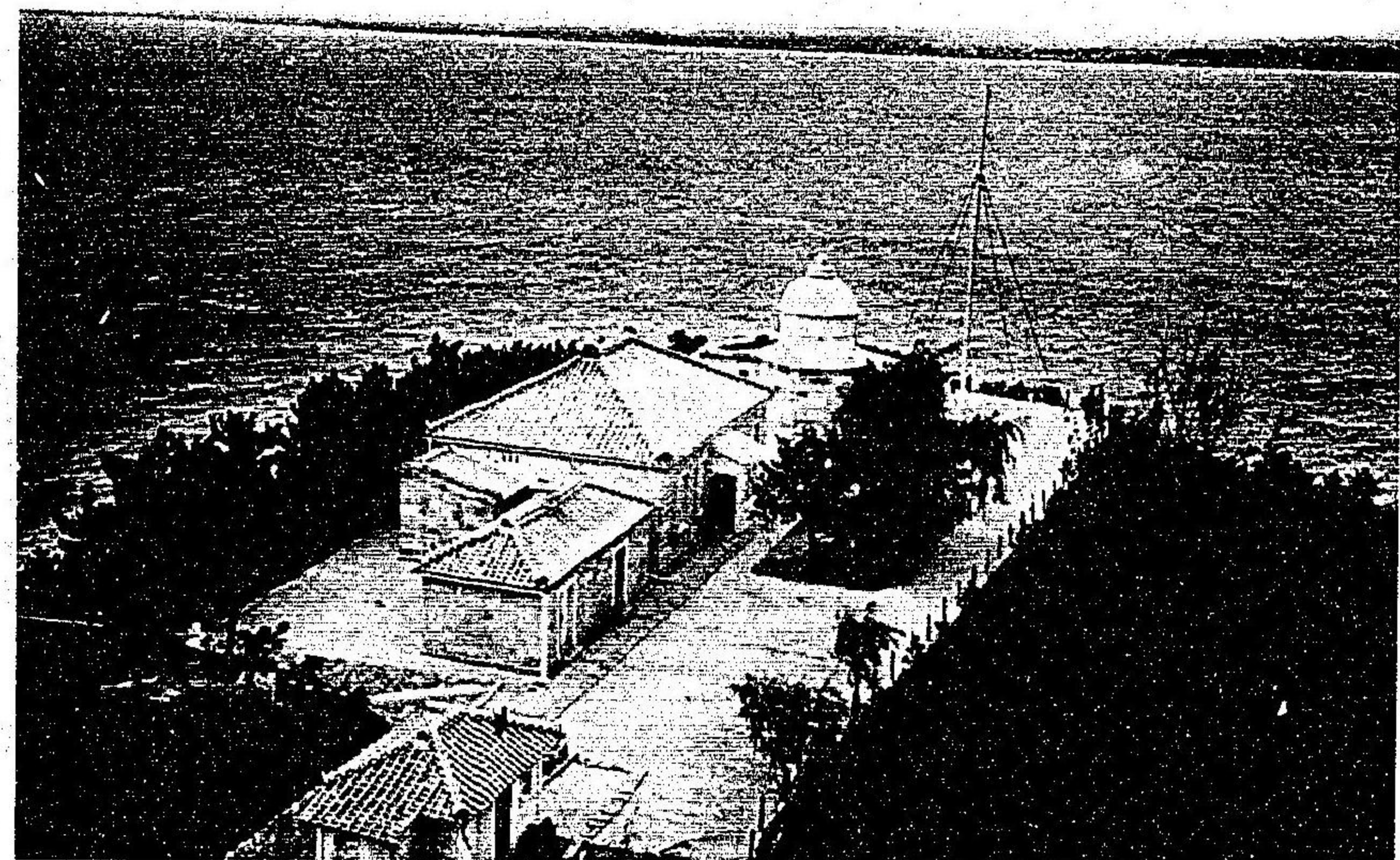
YESAKI LIGHTHOUSE. (AKASHI STRAIT.)

江崎燈臺

淡路國津名郡岩屋町(播淡海峡)

北緯 三四度 三六分 自基礎至燈火 十五尺 光力 千七百五十燭光
東經 一三五度 〇分 自水面至燈火 百五十八尺 光達距離 十七海里

江崎ハ淡路ノ北端小磯山ノ中腹ニ在テ明石海峡ニ臨ミ内海ノ咽喉ニ位シ風光明媚波間時々燈光ノ映發スルヲ見ル亦得難キ景勝トス燈臺ハ和田岬ト同ク兵庫開港ノ爲ニ其建設ヲ急キ明治三年四月基地ヲ開拓シ東西約十間南北約廿五間ヲ平夷シ石造白色圓形燈臺及官舎ノ工ヲ起シ四年四月落成點燈ス
當初据付ケタル燈器ハステブソン氏ノ全光反照鏡拾九個ナリシモ卅年二月之ヲ廢シ三等不動白色燈ニ改メ又卅二年十一月紅色硝子板ヲ挾ミテ鹿ノ瀨ノ方向ヲ示ス
平磯柱燈立標及ヒ鹿ノ瀨浮標共ニ此燈臺ノ管理スル所ナリ



男木島燈臺

讃岐國香川郡雌雄島村(讃岐海)

北緯 三四度 二六分 自基礎至燈火 四十一尺 光 力 九百燭光
東經 一三四度 三分 自水面至燈火 四十八尺 光達距離 十二海里

明石海峽ヨリ西航スル大船ハ必ズ小豆島ノ南邊ヲ右折シ
讃岐海ヲ經過ス而シテ小豆島ヨリ六島ニ至ル約四十海里
ノ間ハ暗礁起伏島嶼散點シ航路ヲ誤リ易キヲ以テ小豆島
以西ニ於テ始メテ轉針スベキ處ノ男木島ハ最モ燈臺必要
ノ位置ナレバ明治廿八年五月起工同島北端ニ於テ石造燈
臺ヲ建設シ六等回轉燈ヲ据ヘ綠光ヲ以テアツサ岩及中瀬
ヲ示シ紅光ヲ以テゾノ瀬ヲ示シ此年十二月ヲ以テ點燈
シタリ



鍋島燈臺

讃岐國仲多度郡與島村(鹽濱瀬戸)

北緯 三四度 二三分 自基礎至燈火 二十一尺 光 力 五百燭光
東經 一三三度 四九分 自水面至燈火 八十五尺 光遠距離 十五海里

鍋島ハ丸龜ノ沖ニ在ル小島ニシテ播讃海ヲ航スル船舶ノ
唯一ノ航路ナルガ上ニ島岐散在暗礁棋布シ針路ヲ誤リ易
キヲ以テ燈臺建設ヲ必要トシ明治四年十一月起工同五年
三等不動白色燈ヲ點シタリ其後七年十一月之ヲ四等不動
白色燈ニ改ム
波節岩掛燈立標及近頃碇置シタル沖ノ洲瓦洲兩自鳴浮標
ハ本燈臺ニ於テ之ヲ管理ス

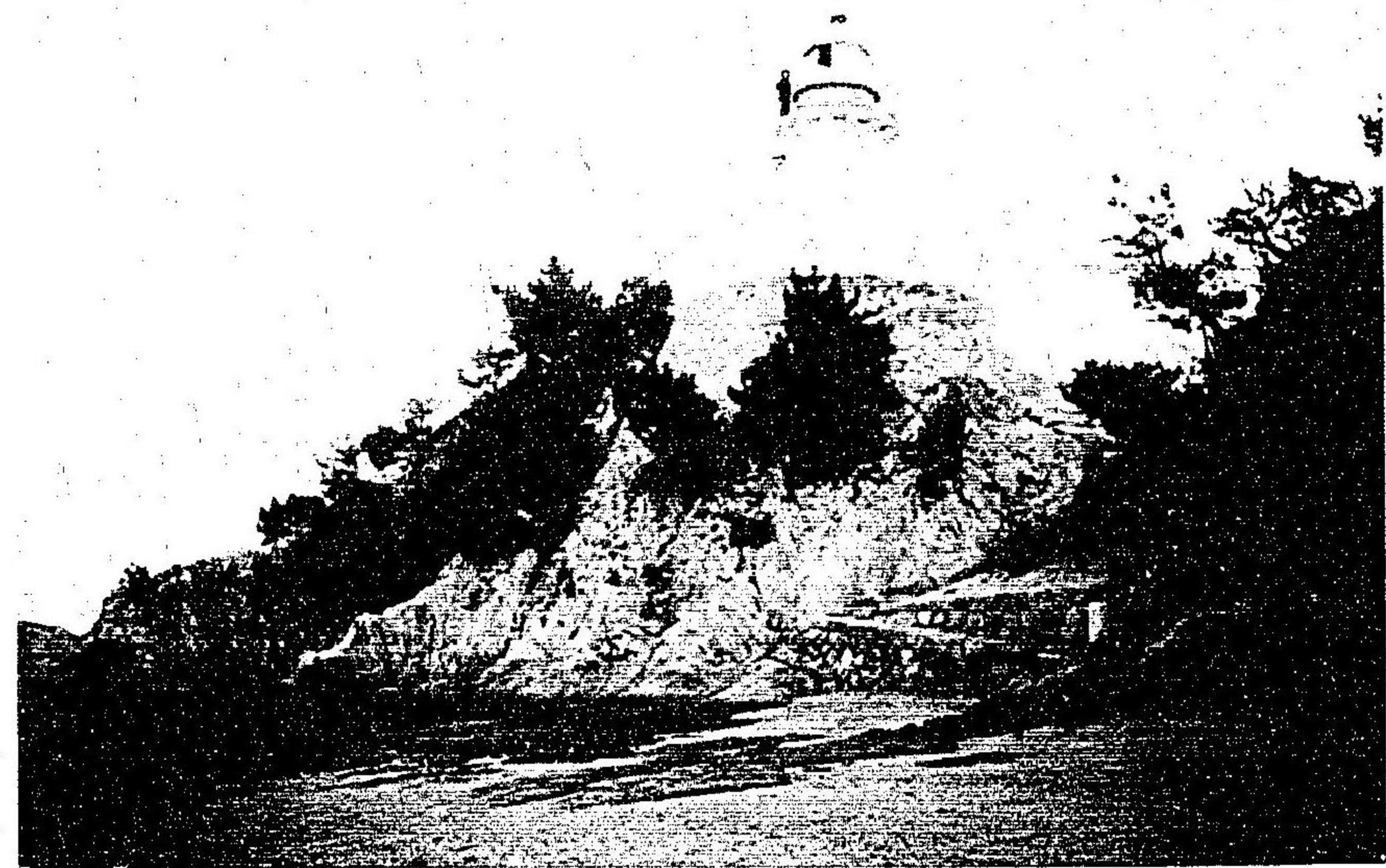


大濱埼燈臺

備後國御調郡大濱村(布刈瀬戸)

北緯 三四度 二二分 自其燈臺燈火 二十一尺 光 力 百燭光弱
東經 一三三度 一〇分 自水面至燈火 五十二尺 光達距離 八海里

布刈瀬戸ハ播防兩洋ノ間ニ於ケル航路ニシテ其間群島暗
洲散在シ且急潮奔騰スルヲ以テ暗夜ニ際シテハ航海者方
針ヲ定ムルニ苦シミ空ク天明ヲ俟テ進航シ船舶ノ常ニ不
便ヲ感シタル所ナルノミナラズ一朝有事ニ際シ我軍艦ノ
機ヲ失スル虞ナントモザレハ蚤トニ燈標設備ノ必要ヲ認
メタル所ナリ明治廿六年其計畫漸ク成リ布刈瀬戸航路標
識トシテ百貫島、大濱埼、小佐木島、高根島、大久野島、（中ノ）
鼻、大下島及長太夫ノ九ヶ所ニ燈標ヲ設備スルユト、ナリ
而シテ百貫島、大久野島及大下島ノ三燈臺ノミ官舎ヲ設備
シ看守ヲ配置シ自余ハ此三燈臺ニ分属ス此等燈標ノ設備
成テ彼此前後燈光暎照シ爲ニ前日ノ如キ不便ヲ除却シタ
ルノミナラズ現ニ廿七八年ノ役ノ如キ我軍艦ノ此航路ヲ
經山スルモノニ向テ大ニ便益ヲ與ヘタリ
本燈臺ハ因ノ島ノ北端ニアリテ布刈水道燈臺設備ノ一ナ
リ廿六年十一月起工廿七年五月點燈同年七月竣工無等自
色不動燈ニシテ紅光ヲ以テ懸リ瀬ヲ示ス百貫島燈臺之ヲ
管理ス



小佐木島燈臺

安藝國豊田郡鷺浦村(三原瀬戸)

北緯 三四度二分 自基礎至燈火 十六尺
東經 一三三度六分 自水面至燈火 七十四尺 光 力 百燭光弱
光達距離 八海里

本燈臺ハ小佐木島ノ北西端ニアリ前記布刈瀬戸燈標設備
ノ一ナリ廿六年十一月起工廿七年五月點燈全年七月竣工
無等白色不動燈ニシテ大久野島燈臺ノ管理ニ屬ス



高根島燈臺

安藝國豊田郡高根島村(布刈瀬戸)

北緯 三四度二〇分 自基礎至燈火 十二尺 光 力 百燭光弱
東經 一三三度四分 自水面至燈火 百三十九尺 光達距離 八海里

本燈臺ハ高根島ノ北端ニアリテ布刈瀬戸燈標ノ一ナリ廿
六年十月起工廿七年五月點燈全年七月竣工無等白色不動
燈ニシテ紅色硝子板ヲ以テ能地堆ヲ示ス大久野島燈臺ノ
管理ニ屬スルモノナリ



大久野島燈臺

安藝國豊田郡忠海町(布刈瀬戸)

北緯 三四度一八分 自基礎至燈火 十六尺 光 力 百燭光弱
東經 一三二度五九分 自水面至燈火 五十六尺 光達距離 九海里

本燈臺ハ大久野島ノ南端ニアリ布刈瀬戸燈標ノ一ナリ廿
六年十月起工廿七年五月點燈全年七月竣工ス此燈臺ニ於
テ小佐木島、高根島、蘇崎^{スサキ}ノ三燈臺ヲ管理ス燈器ハ無等不動
白色ニシテ能地堆及ヒ神殿島ヲ示スタメニ紅色硝子板ヲ
挿ム



中野鼻燈臺

安藝國豊田郡大崎南村(三原瀬戸)

北緯 三四度一三分 自基礎至燈火 十二尺 光 力 百燭光弱
東經 一三二度五五分 自水面至燈火 百四十二尺 光達距離 八海里

本燈臺モ亦布刈瀬戸燈標ノ一ニシテ大崎島ノ南東端ニア

リ廿六年十月起工廿七年五月點燈同七月竣工無等白色不

動燈ニシテ紅色硝子板ヲ以テ大横島北西方ノ淺瀬ヲ示シ

大下嶋燈臺ニ於テ之ヲ管理ス

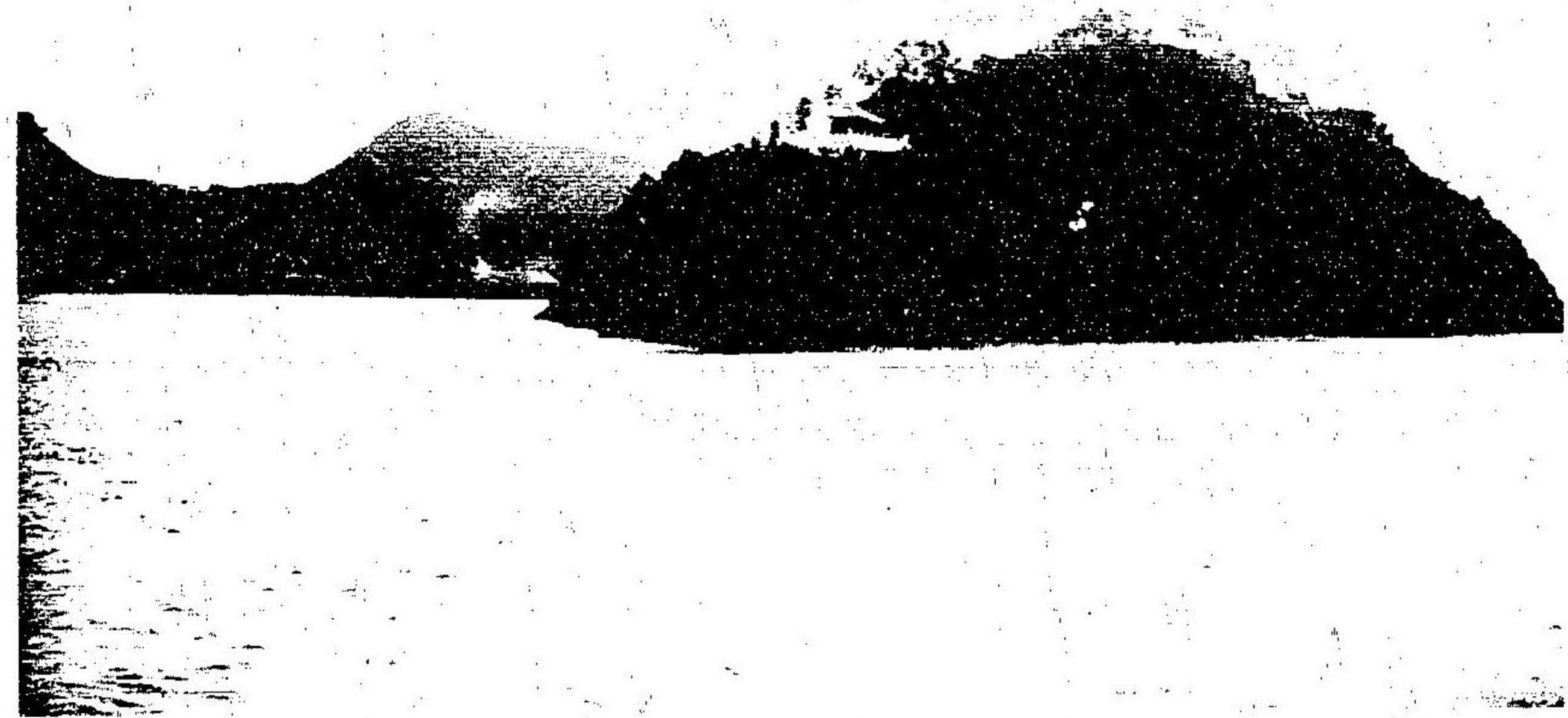


大下島燈臺

伊豫國越智郡關前村(大下瀬戸)

北緯 三四度一分 自基礎至燈火 二十五尺 光 力 千五百燭光
東經 一三二度五五分 自水面至燈火 百十一尺 光達距離 十六海里

本燈臺ニ亦布刈瀬戸燈標ノ一ニ屬シ伊豫灘ヨリ大下水道
ニ入ル門口ニアリ廿六年十一月起工廿七年七月竣工五等
白色回轉燈ニシテ同五月點燈シタリ此燈臺ニ於テ中野鼻
燈臺ヲ管理ス

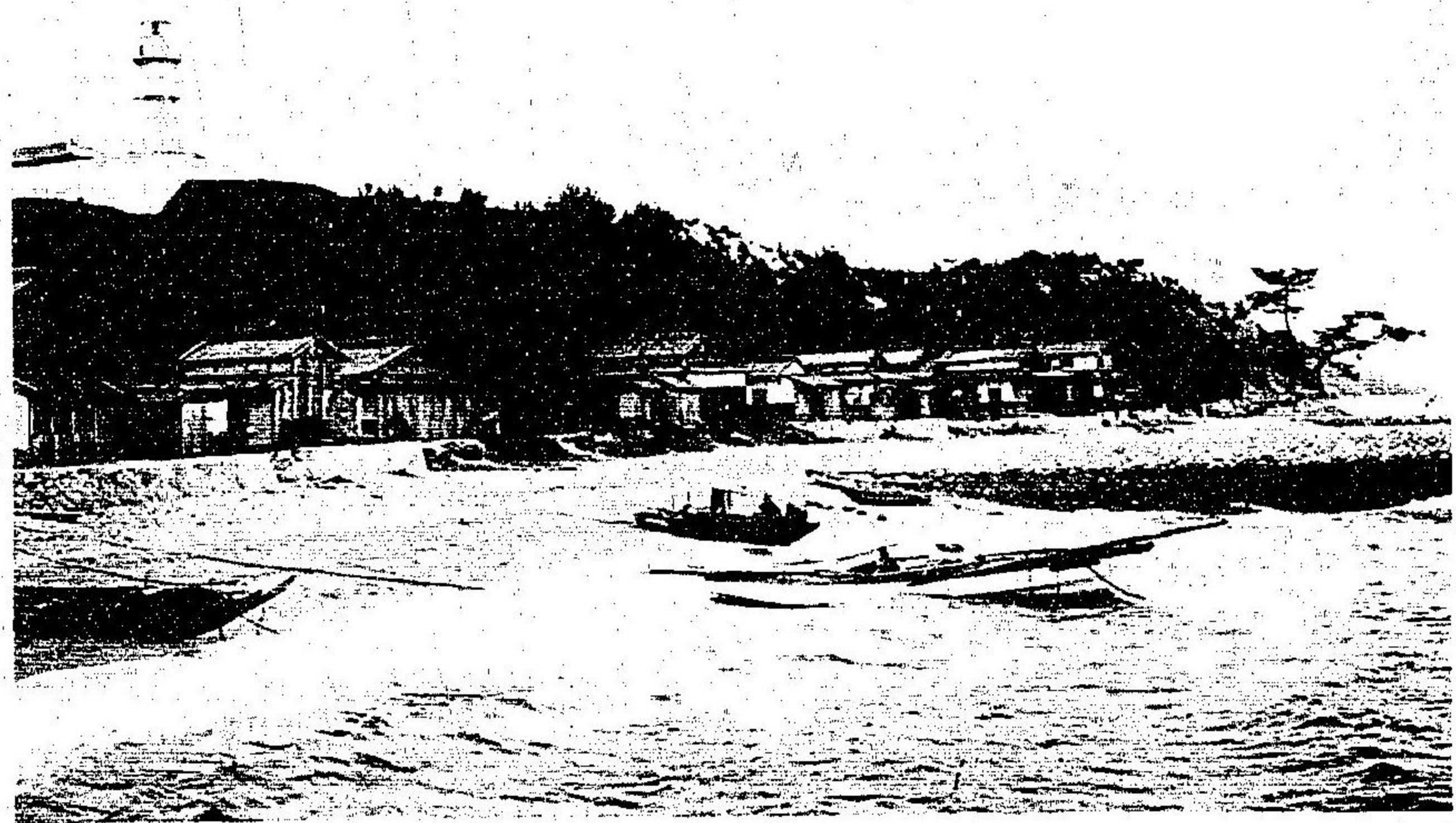


大濱燈臺

伊豫國越智郡近見村(燈灘、來島海峽)

北緯 三四度五分 自基礎至燈火 四十一尺 光 力 七千燭光
東經 一三二度五九分 自水面至燈火 百十四尺 光達距離 十六海里半

來島水道ヲ安全ナラシメンニハ數箇燈標ノ設備ヲ要スル
ヲ以テ明治三十三年中渡嶋燈臺ヲ建設シ又卅五年ニ至
テヨノ瀬及ヒ本燈臺ヲ設ケタリ此三者相俟テ其効用ヲ完
フスルモノナリ
本燈臺ハ來嶋水道ノ東口ニアリ唯ダ其東口ヲ示スノミナ
ラズ該水道全部ヲ照輝セシメンガ爲メ大濱村ノ小丘上ニ
之ヲ建築シタリ卅三年九月起工卅五年四月四等運閃白色
燈ヲ點シ又燈塔脚部ニ不動紅色ノ副燈ヲ設ケモレノ磯及
ヒ龍神嶋ヲ示ス



中渡島燈臺

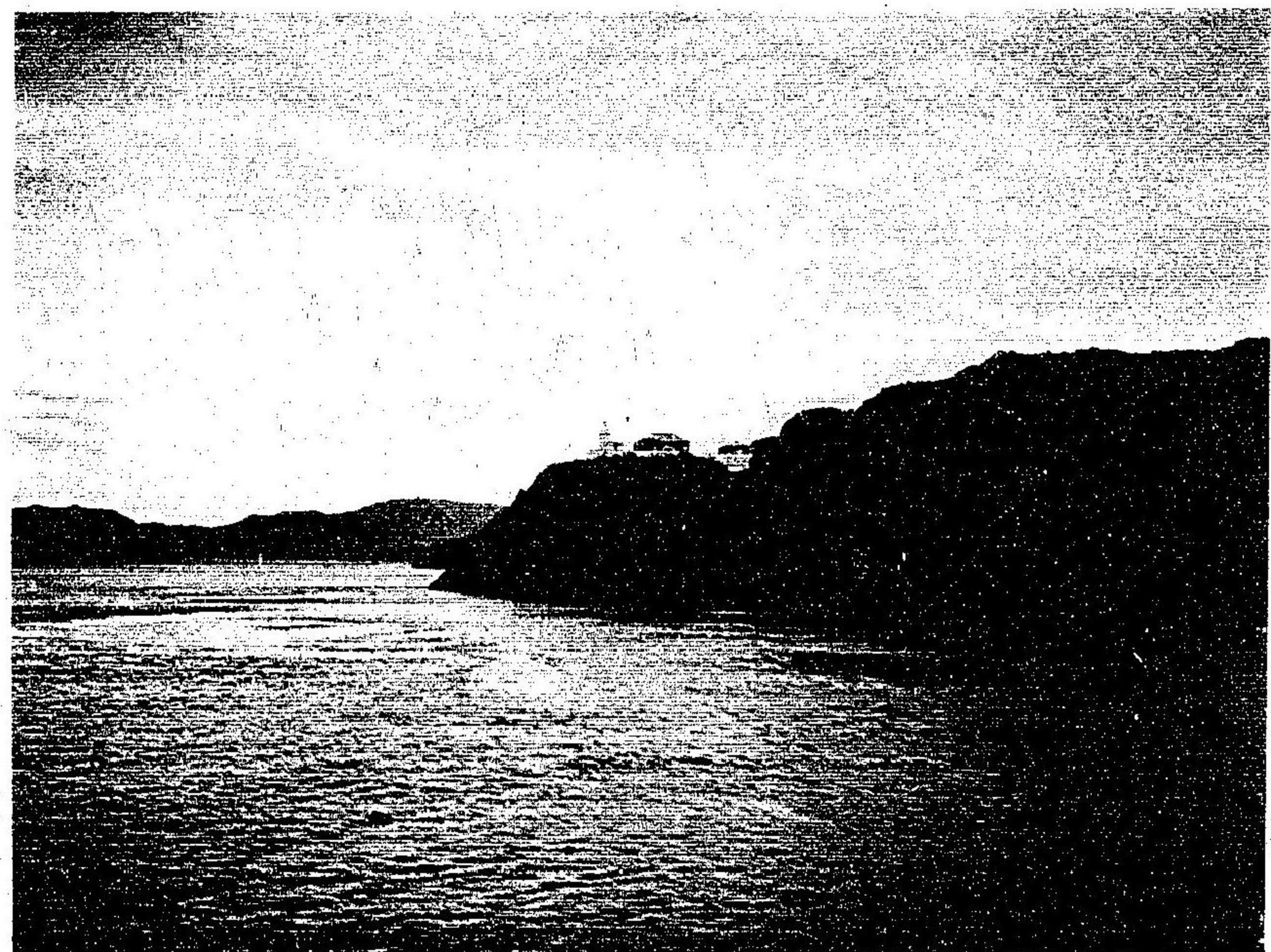
伊豫國越智郡湊浦村(來嶋海峽)

北緯 三四度四分 自基礎至燈火 二十五尺 光 力 百燭光弱
東經 一三三度〇分 自水面至燈火 百二十六尺 光達距離 九海里

來嶋海峽燈標設備ノ一ナリ卅二年六月起工卅三年三月竣

工燈臺ハ石造圓形白色ニシテ全四月無等不動白色燈ヲ點

ス

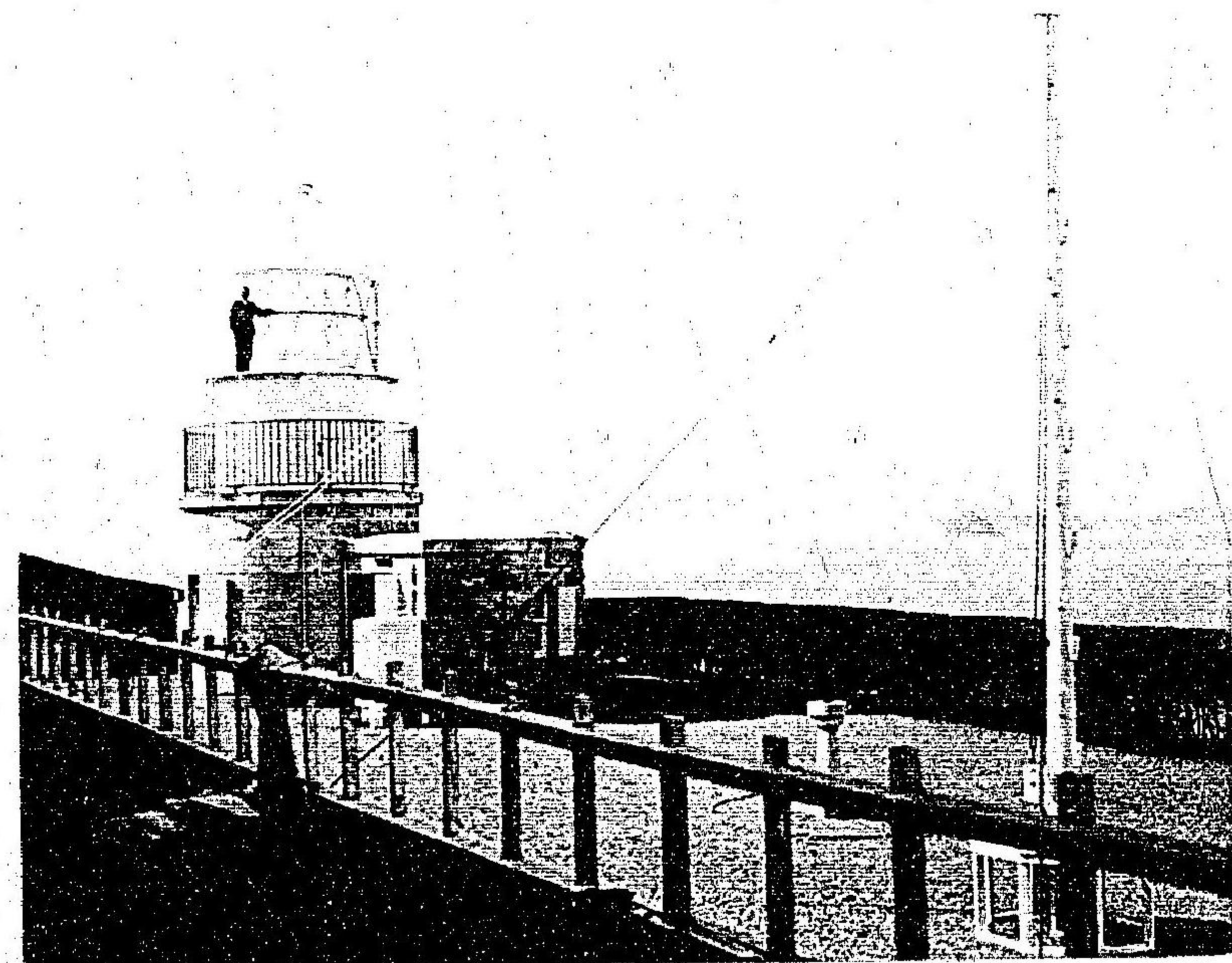


釣島燈臺

伊豫國温泉郡興居嶋村(伊豫海、釣嶋水道)

北緯 三二度 五四分 自基礎至燈火 二十一尺 光力千七百五十燭光
東經 百三三度 三八分 自水面至燈火 百八十六尺 光達距離 二十海里

大坂條約及ビ兵庫開港ノ結果ニヨリゾラントン氏ノ撰定
シタル位置ニシテ今治ノ代リニ此地ヲ撰ミタルナリ此地
藝豫間ニ於ル南方水道ノ葦ミ瀬戸内海ト周防灘ヲ航スル
船隻ノ目標トスル處ナリ明治四年九月起工燈臺及ビ官舎
ヲ建築シ六年七月竣工點燈シタリ燈器ハ三等不動白色ナ
リ



セングアイ岩掛燈立標

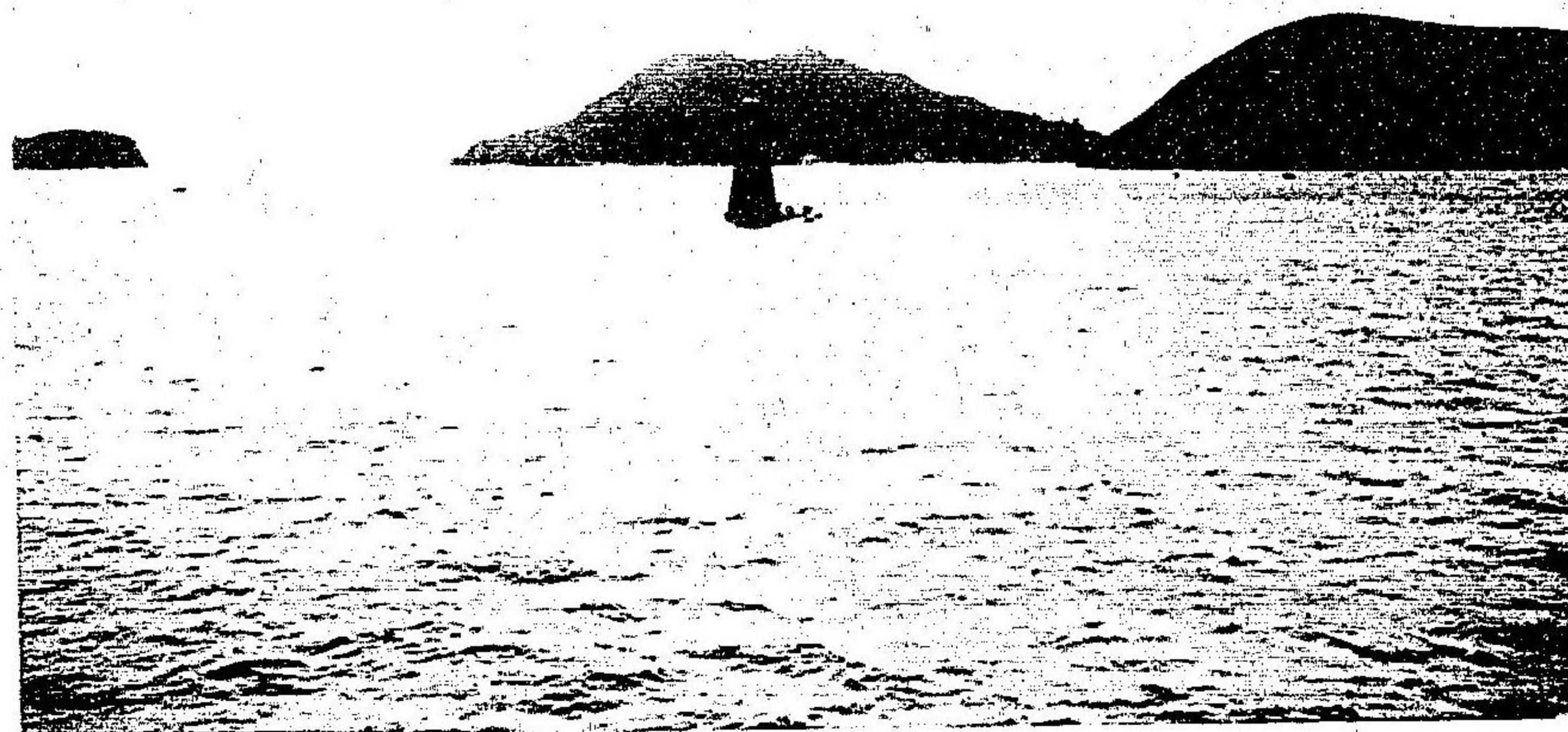
周防國大島郡油田村(伊豫灘水道)

北緯 三三度 五七分
東經 一三二度 三〇分

自水面至燈火 四十六尺

光 力 百燭光
光達距離 十一海里

本立標ハ藝豫海峽情島ト二神島ノ間ニアル根ナシ岩上ニ
 アリ此地釣島ト同シク船舶航通ノ頻繁ナル位置ニ位スル
 モ礁上干潮面水深三尺東西長約四十間ニシテ古來坐欄ス
 ルモノ甚多シ因テ明治卅三年九月起工標身上部鉄造下部
 石造圓形紅黒横線ニ塗リ卅五年四月ヲ以テ六等不動白色
 燈ヲ點ス官舎ヲ設ケス看守ハ怒和島ニ在テ之ヲ監視ス

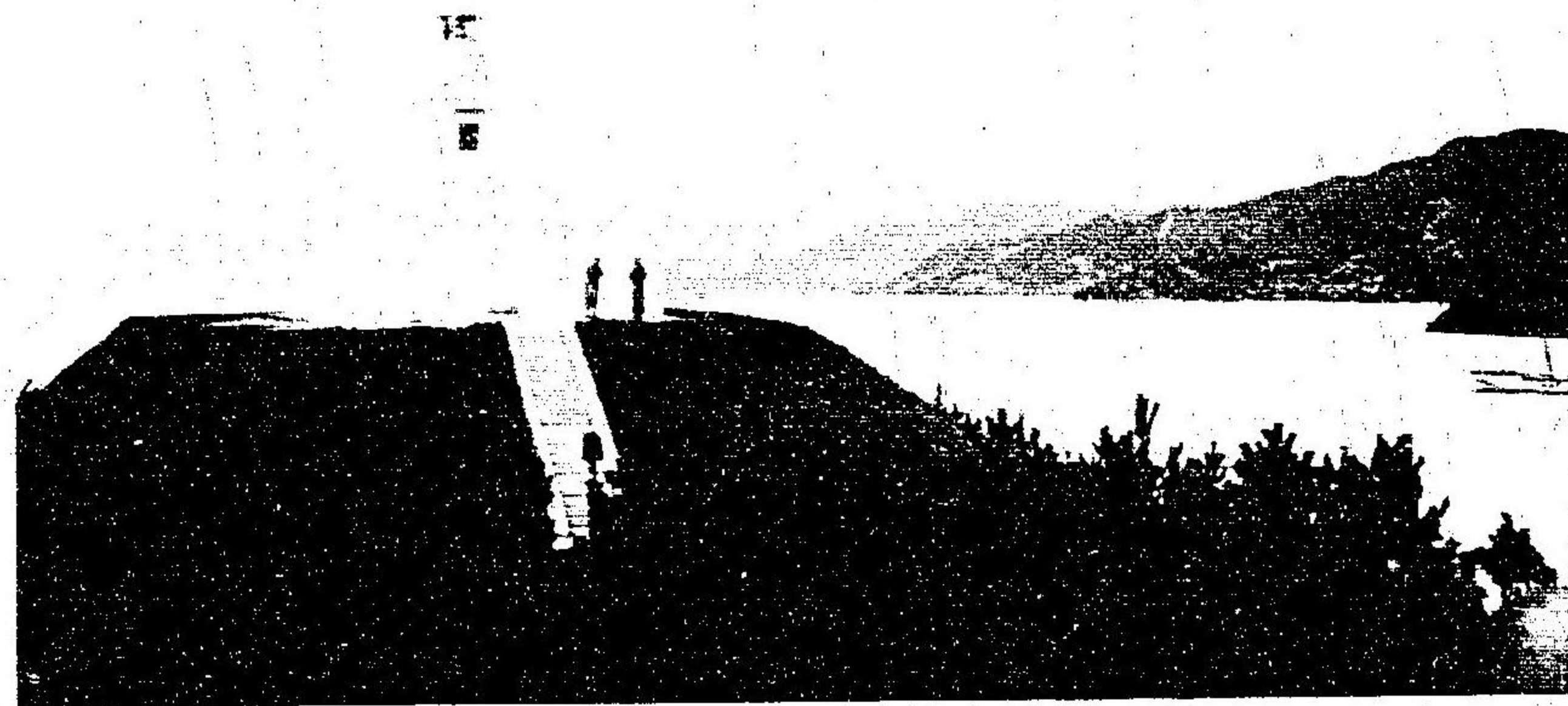


クダゴ島燈臺

伊豫國温泉郡 (伊豫内海)

北緯 三三度 五八分 自塔至燈火 二十五尺 光力 七百五十燭光
東經 一三二度 三四分 自水面至燈火 百七十九尺 光達距離 十七海里

忽和島ノ東方ニアルクダゴト稱スル小嶋ノ上ニアリ伊豫
灘ヨリ周防灘ニ入ルモノ多クハ此途ヲ撰ム蓋シ釣嶋前ヲ
經過スルニ比シ三四海里ヲ短縮スルヲ以テナリ
卅五年七月起工ス燈籠内ニ六等紅白閃光器ヲ据ヘ電池及
發電器ヲ備ヘ三週間以上燈火及回轉ヲ繼續スベキ装置ヲ
施シ卅六年四月十日ヨリ點燈シ忽和島ニ在住スル看守ヲ
シテ本燈及ヒシガイ岩燈ヲ管理セシム

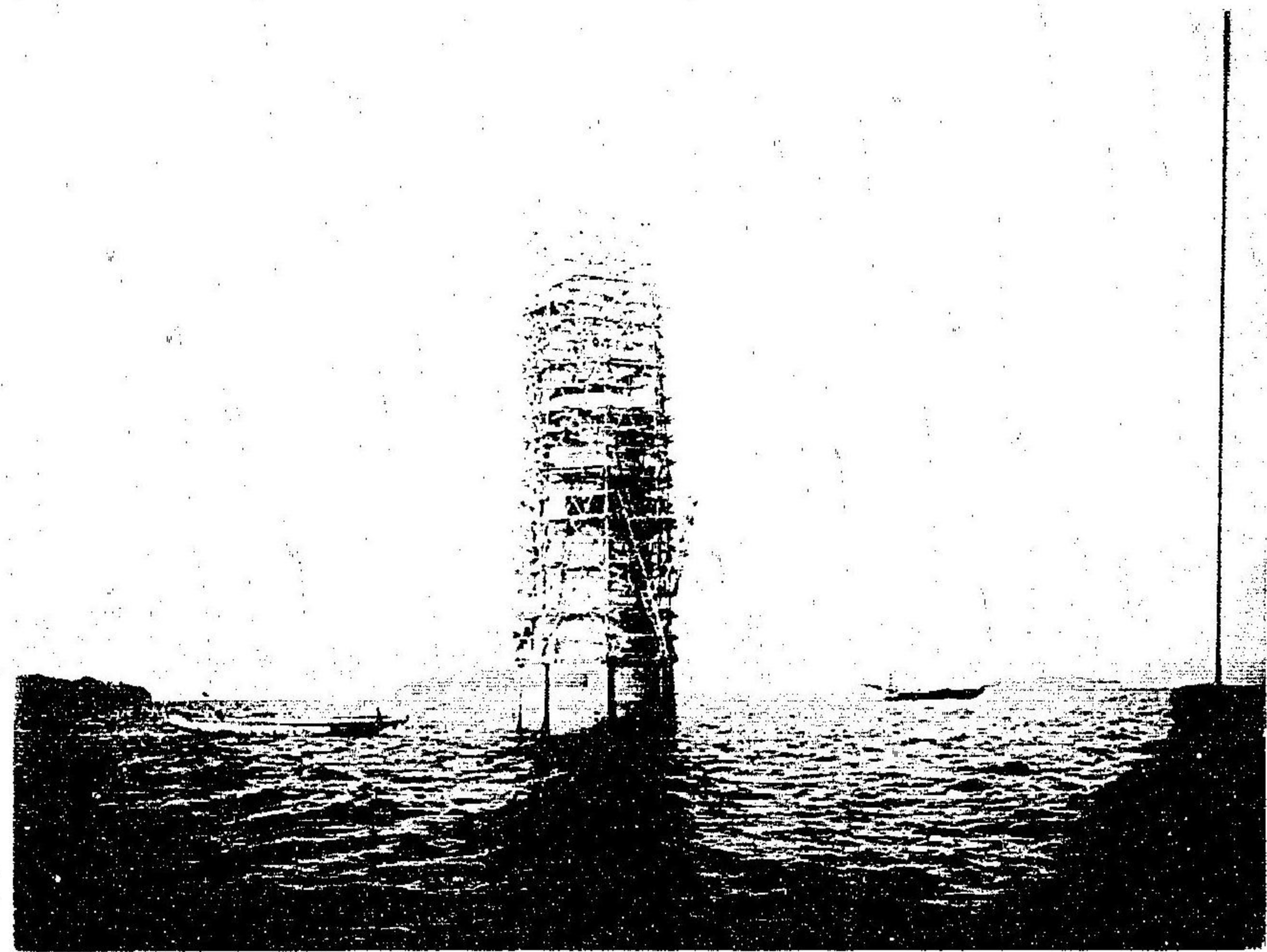


西ノゴバン挂燈立標

安藝國安藝郡倉橋島村(廣島灣)

北緯 三四度四分
東經 一三二度二六分
水面至燈火 五十尺
光力 三千燭光
光達距離 十二海里

西ノゴバンハ倉橋島ノ南西ニアル暗礁ニシテ怒和島又ハ
コセンガイ岩ヨリ北折スレハ廣島灣ニ入り船舶ノ吳鎮守府
及宇品港ニ來往スル要路ニ當ル而シテ此間屈曲スルノミ
ナラズ險礁渺ナカラサルヲ以テ其最險ナル西ノゴバン礁
上ニ燈臺ノ目標ヲ必要トシ卅五年八月起工標身ハ上部鉄
造下部石造圓形ニシテ紅色ニ塗り頭ニ六等閃光白色燈ヲ
掲ク本年三月ヲ以テ竣功點燈セリ



SHIRAIISHI BEACON LIGHT. (HIROSHIMA BAY.)

白石挂燈立標

安藝國佐伯郡小方村(廣島灣)

北緯 三四度 二一分
東經 一三二度 二二分

自水面至燈火 五十六尺

光力 一千燭光
光達距離 十三海里

廣島灣阿多田島ノ東微南約壹海里半ニ干潮時ニ南北約三百尺ヲ隔テ、露出スル二礁アリ白石ト云フ立標ハ其北礁ニ建設シタルモノニシテ佐世保軍港及守品ニ出入スル航路ニ當レリ立標基址圓徑貳拾參尺自基址至頂上高六拾壹尺九寸燈籠内ニ五等紅白連閃光反折器ヲ據ヘ電池及發電器ノ力ヲ籍リテ之ヲ回轉シ十五秒時毎ニ白色二連閃光紅色一閃光ヲ發セシメ燈火及回轉共三週間以上自働繼續スル装置ナリ官舎ハ阿多田島ニ設ケ此所ニ看守ヲ置キテ管理セシム明治卅四年十月起工明治卅六年四月ヨリ點燈セリ



臺場鼻燈臺

長門國豊浦郡彦島村大字彦島(馬關海峽西口)

北緯 三三度 三七分 自基礎至燈火 三十尺 光 力 百燭光弱
東經 一三〇度 五二分 自水面至燈火 七十六尺 光達距離 八海里

竹ノ子島ハ彦島ノ西北ニ在ル一小島ニシテ北ニ六連島燈
臺西北ニ白洲燈臺ヲ望ミ下ノ關海峽ニ出入スル船舶ノ針
路ヲ更ムル所ニ方リ崎端ノ海中ニ暗礁羅列シ航海ニ危険
ナル位置トス燈臺ハ島ノ西端宇彥島ト稱シ舊時
砲臺ヲ設置シタル處ニ在リ明治三十
二年五月起工翌三十三年四月ヲ以テ初メテ點燈ス構造ハ
煉瓦石造白色ノ圓形ニシテ不動白色ノ燈火ヲ點ス下ノ關
ノ西目ニハ大礮根、空瀕、トウリ出シ、平瀨等數個ノ洲礁散在
スルヲ以テ燈籠ニ二個ノ紅色玻璃板ヲ挿ミテ其所在ヲ示
セリ



若松港燈臺

筑前國遠賀郡若松町(玄界灘)

北緯 三三度五五分 自基隆至燈火 二十五尺 光 力 三十二燭光
東經 一三〇度四九分 自水面至燈火 二十九尺 光達距離 六海里

明治十年ノ頃ヨリ筑前炭ヲ若松港ニ輸出シ漸次其産額ヲ
増シ明治二十年ノ頃若松築港會社興リ防波堤ヲ新築シ港
口ヲ浚深シ新市街地ヲ埋築シ石炭輸出ノ便ヲ圖リシカ卅
二年ニ至リ入幡濱ニ官立製鉄所ノ創設アリ益々船舶ノ出
入ヲ増加シタリ是ヲ以テ三十六年三月燈臺公設ノ許可ヲ
得此年八月無等不動ノ紅色燈ヲ點セリ燈臺ハ突堤ノ極端
ニアリ四角形鉄造ニシテ紅色ナリ



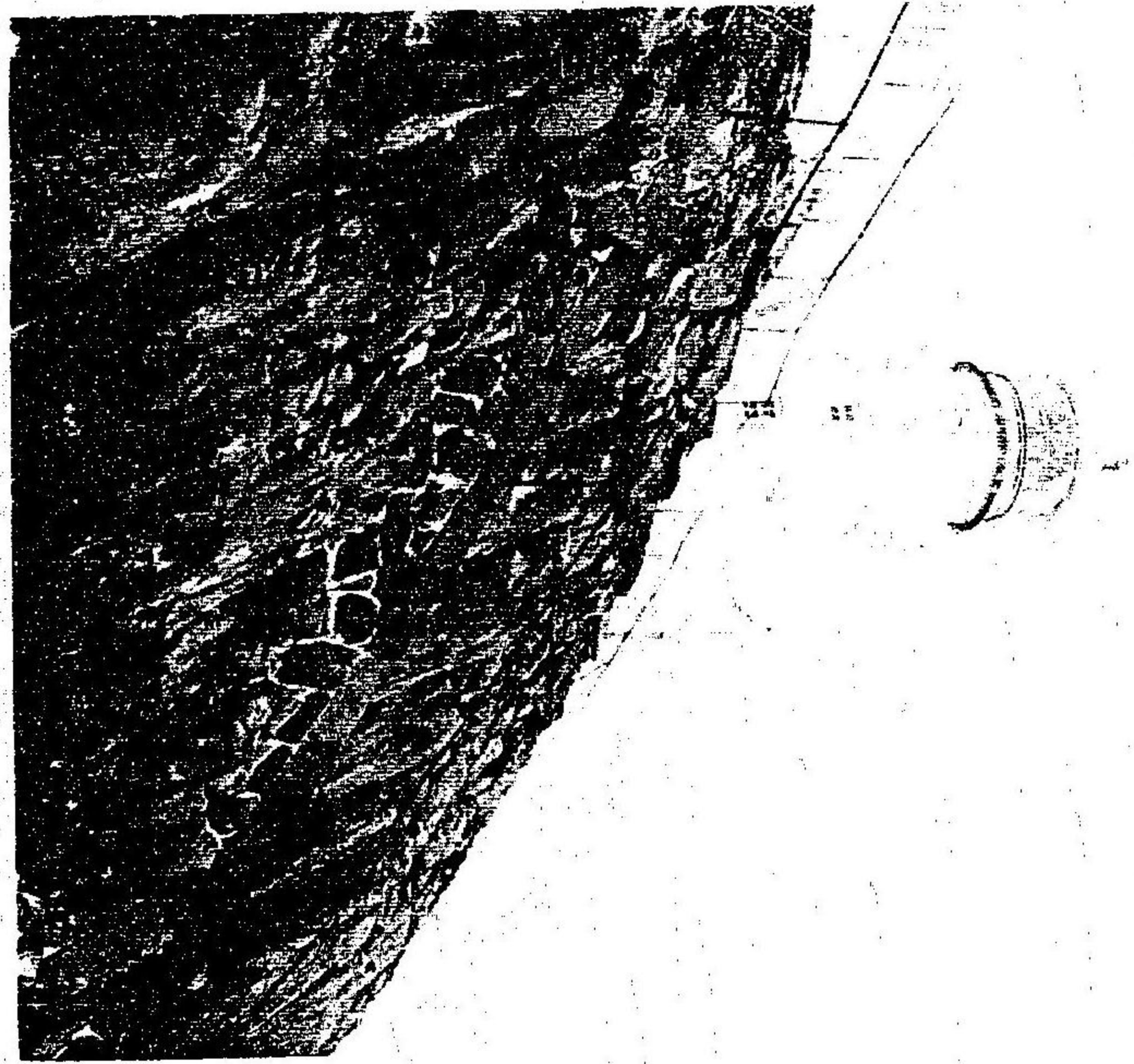
鳥帽子島燈臺

筑前國糸島郡鳥帽子島(玄海灘)

北緯 三三度 四一分 自其燈至燈火 四十四尺 光力 三千五百燭光
東經 一二九度 五九分 自水面至燈火 百八十二尺 光達距離 二十海里

鳥帽子島ハ肥前登岐ノ中間ニアリテ玄海洋中ニ壁立スル一孤嶋ナリ馬關ヨリ平戸瀬戸又ハ長崎ニ向フ船舶ノ要路ニ當リ而モ此島ト登岐ノ間ニ名島、ガ瀬等數十ノ暗礁基布シ古來船舶坐擱スルモノ勝テ數フベカラズ故ニ蓋トニ燈臺ノ必要ヲ認メ明治六年八月起工岩上ヲ削平シテ建築ス燈臺ハ白色八角形鉄造ニシテ二等不動白色燈ヲ備ヘ八年八月ヲ以テ點燈ス蓋シ本嶋ハ全然方柱石(又玄武石トモ云ヒ)ヨリ成リ周圍僅ニ七町高サ海面ヨリ十八丈四面禦表僅ニ燈臺及官舎ヲ容ル、ニ過キス從テ一滴水ヲ得ハカラズ因テ南方十三海里餘ヲ距ル肥前呼子港ニ吏員退息所ヲ設ケ看守ヲシテ輪番交替シ併セテ糶米飲水ヲ運搬シ以テ燈火ノ監守ニ従事セシム

本燈臺ハ難場燈臺ノ一ニシテ常ニ二種ノ信号器ヲ設ケ毎日二回之ヲ揚ケテ島中ノ安否ヲ呼子退息所ニ報セシメ急アレバ直ニ船ヲ廻シテ之ヲ救護セシム又天候不真ニ際シテハ渡海ノ杜絶數週ニ及ブコトアリ昔テ之ガ爲メ島中糧食欠乏シ信号ヲ揚ケテ救ヲ求メ辛フシテ餓死ヲ免レタルコトアリ爾來本燈ニ貯米ヲ備ヘ以テ不時ノ變ニ備ヘシメタリ又看守ノ交代渡海ノ危険ナル往々漂流スルノミナラズ難破ノ慘禍ニ罹ルコトアリ現ニ明治九年一月中ノ一ニテ看守横川某三浦某外水夫七名交代渡海ノ際悉ク風浪ノ爲メ難船溺死シ又四五年前ニモ同様交代ノ際難破シ辛フシテ通行船舶ニ依テ救ハレタリ離島燈臺ニ於テハ往々如是ノ危険アルモノ尠ナカラズ

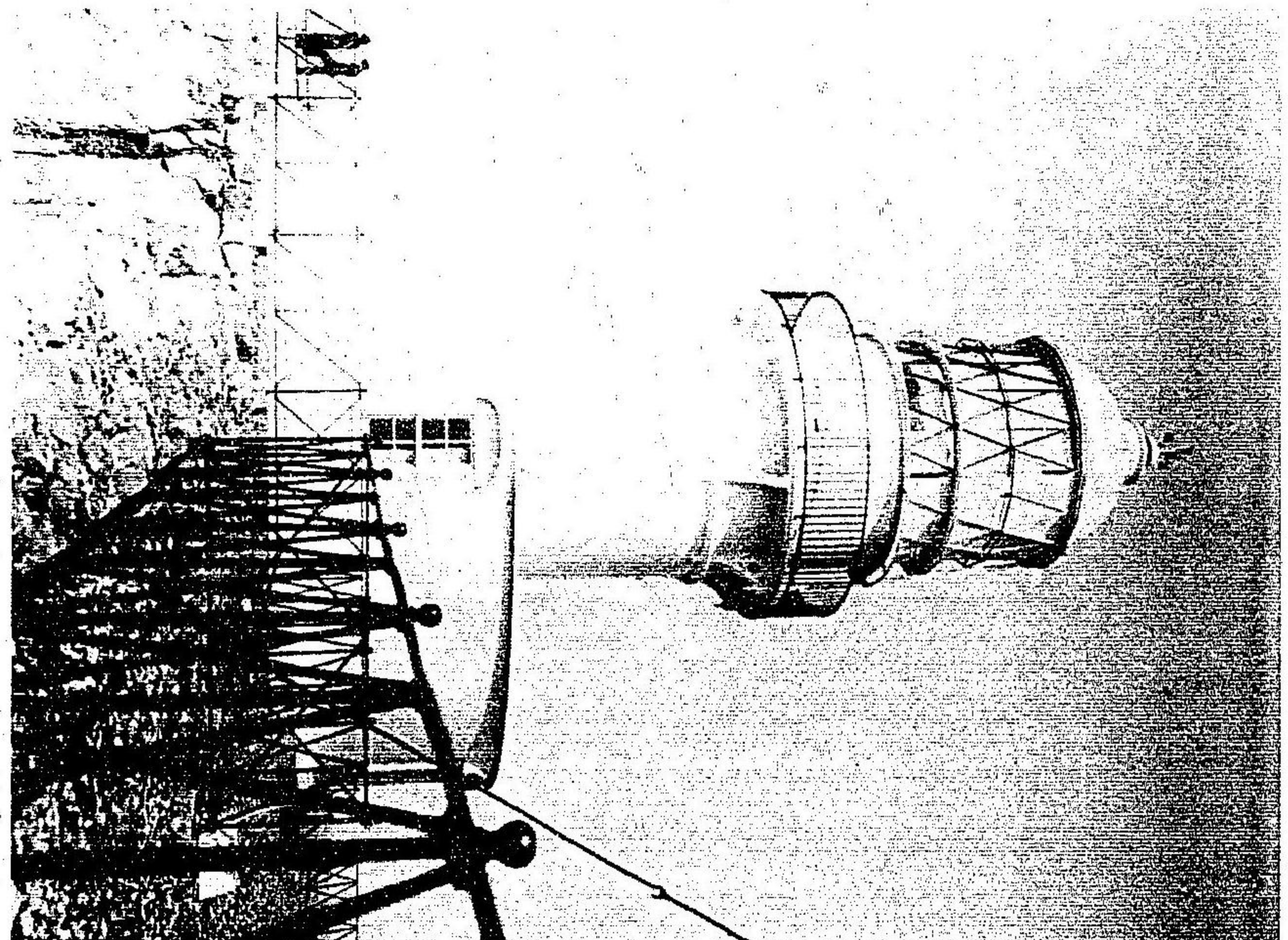


大瀬崎燈臺

肥前國南松浦郡玉之浦村(五島列島)

北緯 三二度三七分 白基礎至燈火 三十六尺 光力六万七千五百燭光
 東經 一二八度三六分 自水面至燈火 二百六十五尺 光達距離 廿三海里

大瀬崎燈臺ハ五島列島福江島ノ南西端ニ方リ支那海ニ面
 スル岬角ノ絶壁上ニ聳立セリ岬邊岩礁兀立シ西南ノ風強
 キ時ハ風潮相闘ヒ岩礁ニ激シテ危險謂フベカラズ琉球、臺
 灣及南部支那ノ諸港ヨリ長崎ニ入港スル船舶ノ始メテ觀
 望スベキ陸地ニシテ強烈ナル燈火ヲ要スルヲ以テ明治十
 一年六月起工十二年十二月始メテ點燈シ全十三年二月竣
 功ヲ告シ
 燈臺ハ鉄造白色ノ圓形ニシテ燈籠ニハ一等回轉白色燈ヲ
 備ヘ毎三十秒時間ニ一光ヲ發セシム



口ノ津燈臺

肥前國南高來郡口ノ津村(早埼瀬戸)

北緯 三二度 四二分 自基礎至燈火 十六尺 光 力百燭光
東經 二二九度 四九分 自水面至燈火 百二十六尺 光達距離 十海里

三池炭山ハ文明元年筑後ノ一農民ノ發見ニ依リ爾來柳川
藩三池藩等ノ經營ニ移リ明治六年六月工部省ノ直轄トナ
リテ以來出炭ノ量ヲ増シ海外へ輸出スルモノハ皆一度口
ノ津ニ集メ此處ニテ大船ニ積替ヘルヲ以テ船舶ノ出入多
ク從テ其港口ヲ標示スル必要起リ明治十三年中起工八角
形石造燈臺ヲ建築シ五月六等不動白色燈ヲ點シタリ然ニ
此地ドトウ虫ト稱スル白蟻族アリテ岸材ヲ侵蝕シ爲ニ廿
八年一月煉瓦石造ニ改築セリ本年三月竣功點燈シタル五
通礁立標ハ此燈臺ノ管理スル所ナリ



寺島立標

肥後國宇土郡戸馳村寺島ノ東北角礁上(藏々ノ瀬戸内)

北緯 三三度 三六分 自基礎至燈火 三十九尺 光 力 百燭光弱
東經 一三〇度 二八分 自水面至燈火 二十七尺 光遠距離 八海里

際崎港ノ前面ニ於ケル寺島ノ礁脚壹海里餘ニ延亘シ干満潮ノ差十四尺ニ至ルヲ以テ明治三十年戸馳島燈臺ト同時ニ本立標ノ建設ニ着手シタリ標身ハ石造圓形黑色ニシテ其上ニ無等不動白色燈ヲ備ヘ卅一年五月ヲ以テ點燈ス

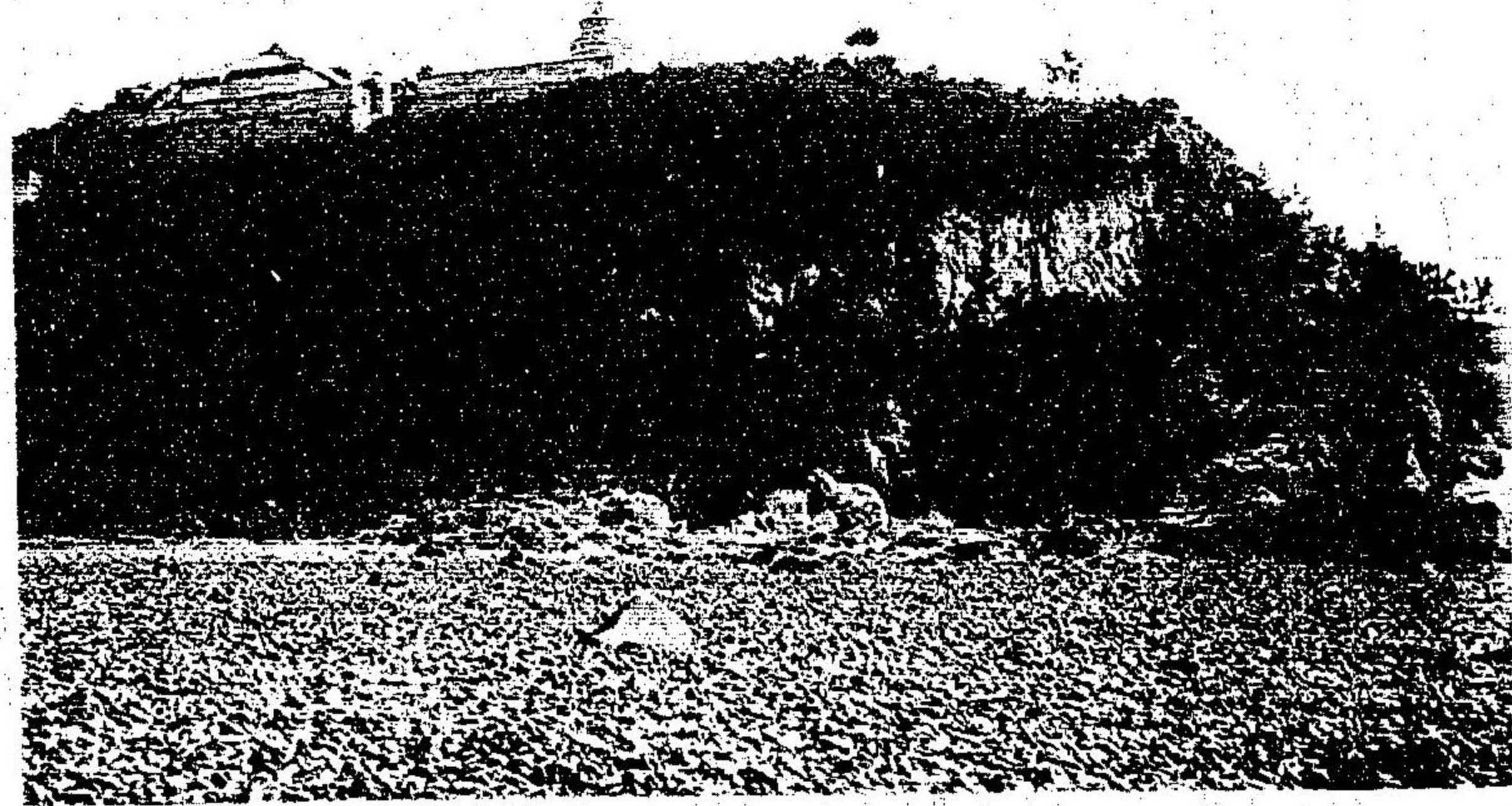


戸馳島燈臺

肥後國宇土郡戸馳島南端(藏々ノ瀬戸)

北緯 三二度 三五分 自基礎至燈火 二十二尺 光 力 百燭光
東經 一三〇度 二九分 自水面至燈火 百〇一尺 光達距離 十海里

本燈臺ハ藏々ノ瀬戸ニ莅ミ際埼港ニ入ル船舶必經ノ地ナ
リ燈臺ハ石造圓形白色ニシテ燈籠ニハ六等不動白色燈ヲ
備ヘ卅一年五月寺島立標ト同時ニ點燈セリ



長崎鼻燈臺 薩摩國出水郡西長島村(長島海峡)

北緯 三二度八分 自基隆燈火 四十二尺 光 四千燭光
東經 一三〇度六分 自水面至燈火 八十二尺 光達距離 十五海里

前年熊本縣廳ニ於テ三角港修築ノ舉アリシモ港内秋隘且
シ潮急ニシテ船ヲ寄スルニ便ナラズ從テ着船甚ダ稀ナル
ニ依リ更ニ其近隣際崎ヲ修築スルニ至レリ該港ハ三角ニ
比スレバ廣濶ニシテ潮流モ急ナラズ貨物ノ積入ニ便ナレ
ドモ之ニ入港スルモノ三角海峡ヨリスレバ其海峡外ニ於
テ憩潮ヲ待タザルヲ得ズ而シテ際崎ニ入ル船舶ハ概ネ支
那海ヨリ來ルモノナレバ長島海峡及ビ八幡海峡ヨリ入レ
バ順路ニシテ待潮ノ不便ヲ免ル、ヲ以テ當事者ヨリ燈標
建設ノ請求アリシ末漸ク明治卅年以後長崎鼻、戸島、上馬刀
島、戸馳島、寺島ノ五ヶ所ニ燈標ヲ建設シ以テ此航路ヲ標示
シタリ

本燈臺ハ長島水道ニ入ル目標ナリ明治廿九年八月起工燈
臺ハ鉄造六角形ニシテ燈籠ニハ四等回轉白色燈ヲ備ヘ十
秒時毎ニ一光ヲ發ス同卅年四月ヲ以テ竣工點燈シタリ

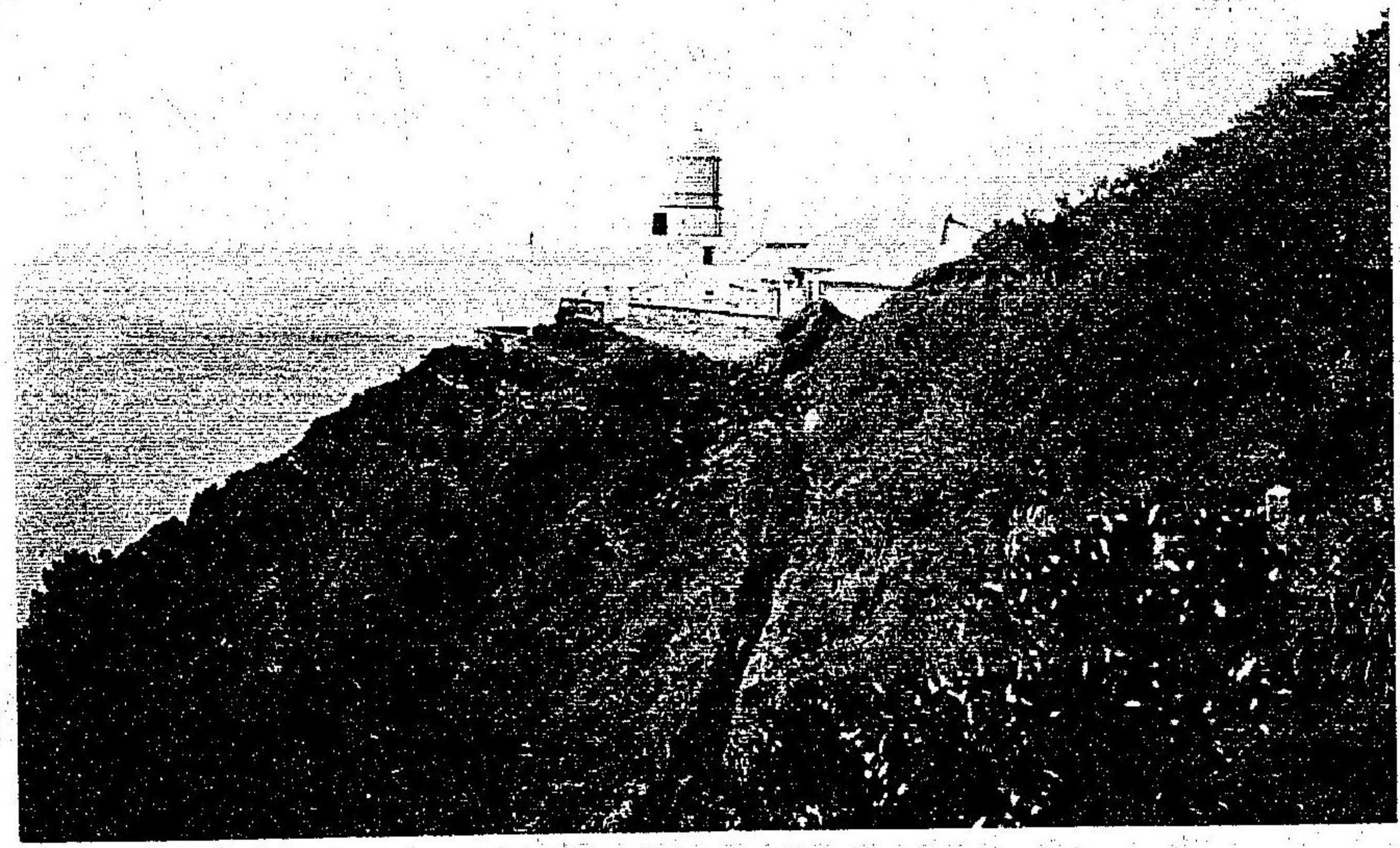


釣掛埼燈臺

薩摩國薩摩郡下飯村(薩摩海)

北緯 三二度 三十分 自其燈至燈火 三十六尺 光 力三万四千燭光
東經 一二九度 四一分 自水面至燈火四百六十二尺 光達距離 二十八海里

廿七八年日清戰役ノ結果臺灣ヲ我版圖ニ収メラレタル以
來同嶋ヘノ航海頻繁ナルヲ以テ廿八年六月陸軍省内ニ臺
灣臨時燈標建設部ヲ置カレ本所員十數名其部員ニ列シ之
カ經營ノ事ニ當ル軍費ノ内金四拾七萬四百圓餘ヲ支出シ
釣掛埼(以上)屋久嶋、曾津高埼(以上)伊江嶋、先原埼、津堅嶋(以上)、鼻頭
角、富貴角(以上)ノ八燈臺ヲ建設ス落成ノ後臺灣ニ於ル燈臺
ハ臺灣總督府ニ其他ハ凡テ本所ニ引繼キ臨時燈標建設部
閉鎖セラレ本燈臺ノ建築ハ乃チ軍資支辨ニ屬スル一ナリ
釣掛埼ハ薩摩國下飯嶋ノ東南端ニシテ此地ハ大瀬埼ト同
ク臺灣ヨリ長崎ニ直航スル船舶ノ目標トナスベキ地ナル
ヲ以テ廿八年十一月起工煉瓦造十角形白色ノ燈塔ヲ築造
シ燈籠器械ハ八面構造ノ一等二連閃光反射器ヲ据ヘ回轉
機械ヲ以テ之ヲ回轉シ一分時毎ニ白色二連閃光ヲ放ツシ
ムルモノトシ明治廿九年十二月竣功點燈セリ



屋久島燈臺

大隅國熊毛郡上屋久村(土噶爾海峽)

北緯 三〇度 二二分 自基礎至燈火 五十尺 光力六万七千五百燭光
東經 一三〇度 二四分 自水面至燈火二百二十九尺 光達距離 二十一海里

此燈臺モ伊江島又ハ曾津高崎燈臺等ト同シク臺灣臨時燈
標建設部ニ於テ建築シ後本所管理ニ移リタルモノトス蓋
シ鹿兒島ヨリ沖繩ニ至ルニハ口ノ永良部ト屋久島ノ間ヲ
經テ奄美大島ノ東側ニ向フテ順路トス因テ本燈臺ハ廿八
年十二月起工屋久島ノ北西端ナル海面上百七十九尺ノ岩
石ヲ火藥ニテ破碎削平シ圓形煉瓦石造白色燈塔ヲ建築シ
十六邊形燈籠ヲ取付ケ之ニ一等回轉白色燈ヲ備ヘ每一分
時一光ヲ發セシム廿九年十二月竣工卅年一月點燈シタリ

